

中世禅宗の公案禅について

安 藤 嘉 則

The Kōan-Zen in the Zen schools during the Japanese Medieval Period

Yoshinori ANDO

一、大徳寺派で扱われた公案について

中世林下の臨済宗における徹翁派（大徳寺派）と関山派（妙心寺派）ではそれぞれ独自の公案禅の伝統を形成し、特に公案参究の秘訣を伝える密参録なる文献が多く成立していたのであるが、こうした中世の公案禅は近世に多大な影響力を及ぼした白隠禅によって一変したと考えられている。確かに近世の白隠禅の影響は今日の臨済禅を考える上で決定的なものがあるが、しかし大徳寺派においては白隠以後も中世以来の伝統が残っている形跡が認められ、妙心寺派においても、応燈関から白隠へとその公案禅に著しい展開をみせて今日に至るものの、例えば『宗門葛藤集』に伝えられるような公案群の枠組みは、中世に

形成された公案体系に由来していると考えられる。従来中世末期から近世初頭にかけての臨済系の公案禅については、これまで積極的に検討されず、むしろ密参禅として全く否定されてきたのであるが、やはり中世禅宗史研究の中で、残された問題として目を向けることは必要なことではなからうか。確かに密参録の公案への著語や解釈について一々取り上げて穿鑿することは、実参の立場においては意味をもたぬばかりか、百害をもたらすであろう。しかし白隠によって否定され、淘汰されたものが何であったのか、そして中世より受け継がれたものが何であったのか、同じ公案であっても中世の公案禅の扱いと白隠以後のそれとは如何なる相違点が見られるのか、このような問題点を

検討する上でも、中世末から近世初頭にかけての密参録資料は多少なりとも意味を有しているのではないかと思われる。

そこでまず、中世禅宗において多くの密参録を残し、中世末期において大きな影響力を有していた大徳寺派において如何なる公案が参究されていたのか、以下に検討してみたい。

まず最初に、大徳寺派の公案参究の全体像を知る手がかりとして『百五十則 碧巖類則 雲門百則 大灯百二十則』と表紙に示された公案目録(松ヶ岡文庫蔵、写本、一冊)について検討してみたい。この写本には大徳寺派の目録であることが明示されているわけではないが、以下に述べるように、これは明らかに大徳寺派の近世初頭までに成立した公案体系が示されていると考えられる。すなわちこの大徳寺派の公案目録は次のごとくである。

①松ヶ岡文庫蔵『大徳寺派古則目録』(ハ一〇七〇)

一、趙州栢樹子 二、万法 三、地獄 四、崔郎中問趙州^{末上} 五、生死根源 六、五躰六根 七、南泉猫兒 八、万里一條鐵 九、身心不二 十、截釘斬鉄 十一、志一字 十二、馬祖即心即佛 十三、鑊湯無冷処 十四、慈明本来面目 十五、丹霞木佛 十六、五祖釈迦弥勒 十七、五戒 十八、趙州無 十九、趙州有 廿、世尊一字不説 二一、五祖牛窓 櫺 廿二、耽源他心 廿三、黄檗礼拜 廿四、一子出家 廿五、債女離魂 廿六、佛見明星 廿七、趙州放下著 廿八、無業莫妄想 廿九、本有圓成佛 三十、法眼一滴水 卅一、不謗三宝戒 卅二、百丈野狐 卅三、兜率悦三轉語 卅四、達磨無功德 卅五、佛眼報縁虚幻 卅六、灵雲見桃花 卅七、那吒折骨還父 卅八、徳山燭吹滅 卅九、岩頭古帆 四

十、香巖擊竹 四十一、香巖人上樹 四十二、迦葉刹竿 四十三、黄檗六十棒 四十四、雲門露 四十五、臨濟旧業 四十六、有見無見 四十七、林才四料揀 四十八、四賓主 四十九、世尊拈華 五十、達磨面壁 五十一、林才四喝 五十二、趙州大死 五十三、黄竜三関 五十四、生死到来 五十五、文殊是七佛師 五十六、脱躰現成 五十七、心随万境轉 五十八、遠録公末後一句 五十九、林才真正見解 六十、瀉一粒米 六十一、五家弁 六十二、瀉孤峯不白 六十三、應無所住 六十四、雲門三句 六十五、雲門須弥山 六十六、松源三轉語 六十七、道者家風 六十八、清浄本然 六十九、三世諸佛不知有 七十、趙州元字脚 七十一、翠岩眉毛 七十二、趙州牆外底 七十三、室内一盞燈 七十四、雲門普 七十五、徳山作麼、 七十六、子胡牌 七十七、世尊擲出双趺 七十八、慈明三蛇九風 七十九、色身敗壞 八十、露地白牛 八十一、瀉山有句無句 八十二、鳥窠布毛 八十三、雲門鐘声裡披七条 八十四、雲門東山水上行 八十五、唯以一大事 八十六、居一切時 八十七、六祖冷暖自知 八十八、是法住法位 八十九、大灯三轉語 九十、瑞岩主人公 九十一、乾峯法身三種病 九十二、清浄行者 九十三、趙州有麼、 九十四、我從賢聖法 九十五、婆子燒庵 九十六、雲門乾屎橛 九十七、林才無位真人 九十八、雪峯三世諸佛 百、生滅、已 九十九、南泉昨夜三更 百一、佛界魔界 百二、八境界

五十則

一、首山竹篋 二、芭蕉主丈 三、林才劔刃上事 四、趙州大蘿蔔 五、巴陵雞寒上樹 六、定上座佛法大意 七、林才洗脚 八、林才四照用

九、大人境界 十、林才晴炉辺 十一、官人千羊 十二、三聖透網金鱗
十三、徳山入門便棒林才入門便喝 十四、林才賓主歴然 十五、雲門餉
餅 十六、以心傳心 十七、大隋劫火洞然 十八、大隋草鞋置龜背上 十
九、仰山枕头 廿、長生混沌 廿一、汾陽識得主丈 廿二、趙州三轉語
廿三、林才半夏 廿四、俱胝一指 廿五、蜜庵破沙盆 廿六、百丈大虫
廿七、玄沙馳書 廿八、玄沙接物利生 廿九、慈明冬至勝 卅、徳山托
鉢 卅一、趙州火炉頭 卅二、趙州四門 卅三、睦州打毯 卅四、楊億
佛滅二千年 卅五、馬祖翫月 卅六、忠國師三喚 卅七、趙州勘破婆子
卅八、浮盃無剩語 卅九、趙州洗鉢 四十、百丈耳聾 四十一、長沙成
佛成祖 四十二、雲門大用現前 四十三、色即是空 又四十三、雲門舉
教 四十四、南泉佛見法見 四十五、普化打筋斗 四十六、第二代徳山
道得三十棒 四十七、林才三玄 四十八、普化搖鈴 四十九、瀉山水牯
牛 五十、鳥窠諸惡莫作

(中略、ここに碧巖百則の目録あり)

類則

一、達磨無功德_百 二、誰欲招_{卅六則之内有也} 三、五帝三皇是何物_{廿七則之内有也}
四、徳山燭吹滅_百 五、雪峯岩頭驚山成道 六、雲門露_百 七、雲門普_百
八、法眼丙丁童子 九、曹源一滴水_百 十、雲門云拳不顧 十一、雲門釈
迦老師來也_{五十則之内} 十二、遠録公末期一句_百 十三、百丈再參馬祖_{五十則之内}
十四、黄檗礼佛_百 十五、洞山三頓棒 十六、迦葉傳金襴袈裟_百 十七、
香林室内灯_百 十八、香林衲衣下事 十九、無業莫妄想_百 廿、香巖枯木
裡龍吟 廿一、興陽剏侍者金翅鳥 廿二、雪峯云望州亭 廿三、鞠常侍

吳樹菓子 廿四、趙州大王來処 廿五、外道握雀兒 廿六、臨濟道我聞
汝不徳字我喝 廿七、黄檗問百丈從上宗乘 廿八、陸大夫道得哭 廿九、
僧辞大隋文殊普賢 卅、刘鉄磨卓庵 卅一、性空千尺井中 卅二、蓋天
蓋地 卅三、黄檗揉菌子胡去來_{百五十} 卅四、趙州喫茶去 卅五、紫胡門下
立牌_百 卅六、瀉山水牯牛_{百五十} 卅七、南泉文殊普賢佛見_{卅則之内} 卅八、
修山主少林有妙訣 卅九、吳雲兩処豎起拂子 四十、夾山蓮花出水 四
十一、趙州妙峯孤頂 四十二、乾峰示衆拳道 四十三、風穴老特牛答 四
十四、善道和尚遭沙汰 四十五、雪峯僧堂前拈拄杖示衆_{中下根} 四十六、巖
陽路逢一僧 四十七、僧問馬祖佛法大意相便打 四十八、又問西來意 四九、
雲門識情難測 五十、大隋瀉山問方 五十一、九峰見延寿來 五二、定
上座鑊住欽山 五三、定上座逢座主 五十四、瀉山問仰山諸方若有僧來
五五、節瑯琊清浄本然 五六、地藏問僧藏云種田傳飯 五七、長沙翫月
五八、玄沙膿滴々地 五九、盤山真普化打筋斗出_{五十内} 六十、趙州投子蒸
餅 六一、馬祖万法居士頌十方同 六二、翠微一竿竹 六三、曹山鑊湯
炉炭 六四、雪峯木毬 六五、歸宗拽石 六六、木平這个冬瓜 六七、
古徳石頭大底大 六八、鏡清鶴鳩声 六九、鏡清蛇咬蝦蟆声 七十、宝
寿胡釘鉸 七一、米七師月夜断井索 七二、忠國師紫濤供奉 七三、臨
濟遷化正法眼藏_{百五十} 七四、招慶羅山恁广_百 七五、徳山托鉢_{百五十} 七
六、趙州石橋 七七、羅漢沕麻池 七八、黄龍赤斑蛇 七九、趙州牆外
底 八十、馬祖陞座百丈卷席 八一、隻履西歸曾失却 八二、宗道者袈
裟異草鞋_{百内} 八三、宗道者畜生 八四、三世諸佛不知有_{百之内} 八五、南
泉云黄梅七百 八六、鏡清問曹山清處之裡 八七、徳山鏤鋤劔 八八、
雪峯猕猴一面古鏡 八九、仰山官人推官 九十、雲門蘓嚕_{平地上死人無數} 九

十一、芭蕉拄杖^{百五十} 九二、投子三个四个^{月未圖} 九三、曹山問菩薩待定中
九四、石鞏彎弓 九十五、文殊令善財採藥 九十六、地藏三種病人 九
七、曹山如井觀驢 九八、雲門三句^{百之內} 九九、達磨一祖安心^{百之內} 百、
趙州仙陀婆 百一、紫胡捉賊、 百二、破鼈墮 百三、思明見南院江
西剃刀 百四、無辺風月 百五、万斛盈舟

雲門錄

一、清波无透路 二、啐啄之珠機 三、晒眼着 四、遊山翫水 五、普
^{百則之內} 六、東山水上行^{百則之內} 七、舉 八、清機歷掌 九、祇 十、墜 十
一、情識難測 十二、恰 十三、裂破 十四、北斗裡藏身 十五、豁 十
六、吃 十七、一佛二菩薩 十八、傳 十九、知 廿、請師實說 廿一、
露 廿二、須弥山 廿三、的 廿四、深 廿五、利 廿六、燭 廿七、
雲擊兩色 廿八、拄杖敲鼻孔 廿九、日勢称晚 三十、七九六十三 卅
一、揭 卅二、没此古則^{此古則下語并無也} 卅二、塚上生芝草 卅三、快 卅
四、念七 卅五、確 卅六、要 卅七、有粥有飯 卅八、明星現時成道
卅九、受戒太早 四十、滅却五年 四十一、吳樹菓子熟 四十二、舉不
顧 四十三、カ口希 四十四、鑑嘆 四十五、元來饅頭 四十六、死人
無數 四十七、大用現前 四十八、扇子踈跳 四十九、回互不回互 五
十、菩薩當鉢即空 五十一、火焰轉法輪 五十二、靈雲佛出世 五十三、
雪峯中下根 五十四、話墮也 五十五、阿耶、 五十六、光不透脱 五
十七、灌溪沕麻池 五十八、衆生顛倒 五十九、是法住法位 六十、僧
辞大隋 六十一、世尊下生 六十二、雪峯□未出世 六十三、長慶問秀
才 六十四、雲居一錠金 六十五、普現色身 六十六、一箭兩□ 六十

七、合 六十八、過 六十九、領 七十、拽 七十一、來 七十二、放
七十三、出 七十四、平 七十五、識 七十六、速 七十七、瞥 七十
八、開 七十九、發 八十、是 八十一、患 八十二、花 八十三、俱
八十四、一 八十五、苦 八十六、熱 八十七、蛇 八十八、點 八十
九、痛 九十、千 九十一、開塔見真容 函蓋乾坤 截斷衆流 隨波逐
浪 測 九十二、逢達磨 臘月廿五 滅却五日 乾屎橛 鐘声裡杖七条
生死到來

大灯國師百二拾則

一、牛過窓櫺^{百則之內} 二、翠岩眉毛^{百則之內} 三、雲門死人^{無數授業類則內} 四、
香巖樹上^{百則之內} 五、乾峯三種病^{百則之內} 六、趙州狗子佛性無^{百則之內} 七、
鴻山有句無句^{百則之內} 八、鴻老好雪片々^{百則之內} 九、馬祖万法^{百則之內} 十、玄
沙不見一法 十一、香巖祖師禪 十二、靈雲桃花^{百則之內} 十三、岩頭黃檗^{百則之內}
十四、長髭朗問訊 十五、金牛飯桶^{百則之內} 十六、趙州放下着^{百則之內}
十七、趙州至道^{碧岩之內} 十八、雲門洞山三頓棒^{類則之內} 十九、松源三轉語^{百則之內}
^{百則之內} 二十、黃龍三関^{百則之內} 廿一、兜率三轉語^{百則之內} 廿二、雪峯火焰
^{百則之內} 廿三、黃檗六十棒^{百則之內} 廿四、臨濟赤團肉^{百則之內} 廿五、岩頭
欽山非無位^{類則之內} 廿六、臨濟家舍途中^{象之內} 廿七、臨濟孤峯頂上^{象之內} 廿
八、臨濟傳語徑山^{五十則之內} 廿九、南泉昨夜三更^{百則之內} 三十、臨濟是柱 卅
一、香林万頭荒田 卅二、洞山冬夜菓子 卅三、舜老更黃昏 卅四、趙
州栢樹子^{百則之內} 卅五、虛堂拄杖 卅六、岩頭德山凡聖 卅七、馬祖因百
丈再參^{五十則之內} 卅八、三聖我逢人 卅九、寒山茄串 四十、世尊陞座^{碧之內}
四十一、世尊拈華^{百則之內} 四十二、王常侍訪臨濟^{象之內} 四十三、良遂

參麻谷 四十四、丹霞木佛百則之内 四十五、楊岐困鳥 四十六、雪豆示衆
 四十七、六祖因僧問 四十八、趙州洗鉢孟五十則之内 四十九、法燈示衆 五
 十、藥山久不陞座 五十一、南泉住庵時 五十二、洞山寒暑碧之内 五十
 三、楊岐示衆 五十四、趙州四門五十則之内 五十五、法眼惠超碧之内 五十
 六、德山托鉢五十則之内 五十七、香林坐久碧之内 五十八、忠國師無縫碧之内 五
 十九、德山不答話 六十、俱胝一指五十則之内 六十一、南泉猫兒百則之内 六
 十二、梁武帝然碧之内 六十三、馬祖目面碧之内 六十四、文殊女子定百則之内
 六十五、清淨行者百則之内 六十六、劉鉄磨老悖碧之内 六十七、百丈奇特碧之内
 六十八、智門蓮華 六十九、保福妙峯頂 七十、雪峯鼈鼻 七十一、龍
 牙禪板 七十二、蓮花拄杖 七十三、雲門對露碧之内 七十四、南泉不說底
 法碧之内 七十五、趙州葡萄碧之内 七十六、雲門正法眼 七十七、雲門露
百則之内 七十八、那吒太子本身百則之内 七十九、慈明三蛇九鼠 八十、古德
 有漏 八十一、花藥欄碧之内 八十二、雲門塵々三昧碧之内 八十三、洞山麻
 三斤碧之内 八十四、雲門乾屎橛百則之内 八十五、趙州三轉語五十則之内 八十
 六、子胡狗百則之内 八十七、雪峯輓毬類則之内 八十八、慈明蓮花棒是 八
 十九、古德三寶 九十、法眼丙丁童子類則之内 九十一、雲門對一說碧之内 九
 十二、雲門倒一說碧之内 九十三、雲門餠餅五十則之内 九十四、臨濟四料揀
百則之内 九十五、四賓主百則之内 九十六、三玄五十則之内 九十七、三要
先師以來不參也 九十八、雲門三句百則之内 九十九、百丈卷席類則之内 百、大隋
 草鞋龜背五十則之内 百一、麻谷持錫碧之内 百二、麻谷到南泉碧之内 百
 三、大隋劫火五十則之内 百四、慈明不冬至牌五十則之内 百五、香林一盞灯百則之内
 百六、法昌過風幡頌 百七、世尊臨涅槃百則之内 百八、仰山問僧近離碧之内
 百九、趙州在南方 百十、阿誰金欄百則之内 百十一、長生問吳雲五十則之内 百

十二、趙州婆子勘破五十則之内 百十三、睦州置茶菓 百十四、虎丘上堂 古人云
 路逢死蛇 百十五、古人云手把夜明斧 百十六、馬祖翫月五十則之内 百十
 七、大川蜘蛛 百十八、大燈三轉語百則之内

本書はまさしく大徳寺派の公案群を全体的に列挙したものであり、
 表題のごとく「百五拾則」(一五二則分)・「碧巖類則」(百五則分)・「雲
 門録百則」・「大燈百二十則」の約四七〇則分の公案の題目が記されて
 いる。この目録で注意されるのは、これらの中「碧巖類則」・「雲門録
 百則」・「大燈国師百二拾則」に見られる古則名において、しばしば「百
 則之内」・「百之内」・「百」・「五十則之内」・「録之内」・「碧岩之内」・
 「碧之内」などといった記述が付されていることである。例えば「雲
 門録」の古則名には「五、普百則之内」・「六、東山水上行百則之内」、また「大
 燈百二十則」では「一、牛過窓櫺百則之内」・「廿七、臨濟孤峰頂上録之内」
 とある。この中「録之内」といった場合の「録」とは『臨濟録』を指
 しているのであるが、いずれにしても大徳寺派においては古則の選定
 が『碧巖録』・『臨濟録』といった公案集に依拠しながらも、特に前百
 則と後五十則に区分けされる百五十則の枠組みが重要な位置を占めて
 いることが理解できる。なお、これらの用例の多くが「百則」と「五
 十則」として引用され、「百五十則」として引用されることが少ないと
 いうことも注意されるであらう。⁽²⁾

この「雲門録百則」や「大燈百二十則」の各則に見られる「百則之
 内」・「五十則之内」という記載であるが、無論百五十則の公案が枠組
 最初にあつて、そこから引いてきたという意味ではなからう。少なく
 ともこの百五十則なる公案群は大燈国師まで遡るものではなく、中世

末から近世初頭の頃、大徳寺派下において整理体系化された公案群であると考えられる。すなわちまず大燈国師宗峰妙超（一二八二—一三三七）によって選定された「大燈国師百二十則」という公案集が先にあって、このような公案集を基盤にして徹翁派下において次第に整理・増広され、百則と五十則としての公案体系のようなものが形成されていたと考えられるであろう。

前出の大徳寺派の目録を見ると、「大燈国師百二十則」の個々の公案には「百則」（三五例）・「五十則」（一四例）・「碧（巖録）」（三二例）・「碧（巖）類（則）」（六例）・「臨濟（録）」（三例）といった記述が付され、この中、百五十則（「百則」と「五十則」と）と「碧（巖録）」とは八十例を占めることになっている。したがって「大燈百二十則」は百五十則や碧巖と明らかに密接な関係を有しており、このことを成立の視点から論ずるならば、「大燈百二十則」中の約五十則分（「百則」と「五十則」と重なる）を核として次第に大徳寺派としての百五十則としての枠組みが成立していると考えられる。またその背景には、後述するような妙心寺派における「碧前碧後」という公案の枠組みが、やはり「大燈百二十則」の枠組みを発展させた形として関山派の公案体系が形成されつつあったということもその成立の一つの要因として考えることもできるのではなかろうか。

いずれにしても近世初頭までに徹翁派下の参禅の伝統を土台にした百五十則の公案群とその密参の伝統が成立し、それを後づける文献が見出せるので、以下においてこの目録と具体的な公案商量が収録される密参録と対照して検討することとしたい。なお、大徳寺派における

「碧巖類則」・「雲門録百則」などの問題については今は特に検討する余裕はないが、これらの文献についてすでに飯塚大展氏の研究が特筆されるであろう³⁾。

そこでまず大徳寺派の密参録文献の中で、前述の百五十則について室内における密参を伝えている文献をいくつか紹介したい。

そこで大徳寺派密参録でまず注意されるのは、従来曹洞宗の快庵明慶の一派の秘参として紹介されてきた『大中寺禅室内秘書 別本丙』である。これはすでに拙著で指摘したように大徳寺派の百五十則の公案体系を知る上で重要な資料であるが、比較的新しい写本のようにあり、また以下に示すように冒頭に紹介した『大徳寺派目録』とかなり一致する密参録である。以下にその古則目録のみを掲げるならば次の如くである。

【久松抱石蔵『百五拾則』の古則目録】

- 一、趙州栢樹子 二、万法 三、地獄 四、崔即中間趙州 五、生死根源 六、五躰六根 七、南泉猫児 八、万里一条鉄 九、身心不二 十、截釘斬鐵 十一、志一字 十二、馬祖即心即佛 十三、鑊湯無冷處 十四、慈明本来面目 十五、丹霞木佛 十六、五祖釈迦弥勒 十七、五戒 十八、趙州無 十九、趙州有 廿、世尊一字不説 廿一、五祖牛窓櫺 廿二、耽源他心 廿三、黄檗礼拜 廿四、一子出家 廿五、債女離魂 廿六、佛見明星 廿七、趙州放下著 廿八、無業莫妄想 廿九、本有圓成佛 三十、法眼一滴水 卅一、不謗三寶戒 卅二、百丈野狐 卅三、兜率悦三轉語 卅四、達磨無功德 卅五、佛眼報縁虚幻 卅六、靈雲見桃花 卅七、那吒折骨還父 卅八、徳山燭吹滅 卅

九、岩頭古帆 四十、香巖擊竹 四十一、香巖樹上 四十二、迦葉刹竿 四十三、黃檗六十棒 四十四、雲門露 四十五、臨濟消旧業 四十六、有見無見 四十七、林才四料簡 四十八、四賓主 四十九、世尊拈花 五十、達磨面壁

百五拾則之内中五拾則目錄

五十一、林才四喝 五十二、趙州大死 五十三、黃龍三関 五十四、生死到來 五十五、文殊七佛師 五十六、脫躰現成 五十七、心隨万境轉 五十八、遠録公末期一句 五十九、林際真正見解 六十、瀉山一粒米 六十一、五家弁 六十二、瀉山孤峯不白 六十三、應無所住 六十四、雲門三句 六十五、雲門須弥山 六十六、松源三轉語 六十七、道者家風 六十八、清浄本然 六十九、三世諸佛不知有 七十、趙州元字脚 七十一、翠岩眉毛 七十二、趙州牆外底 七十三、室内一盞灯 七十四、雲門普 七十五、德山作麼、 七十六、子胡牌 七十七、世尊擲出双趺 七十八、慈明三蛇九鼠 七十九、色身敗壞 八十、露地白牛 八十一、瀉山有句無句 八十二、鳥窠布毛 八十三、雲門鐘声裡 八十四、雲門東山水上行 八十五、唯以一大事 八十六、居一切時 八十七、六祖冷暖自知 八十八、是法住法位 八十九、大灯三轉語 九十、瑞岩主人公 九十一、乾峯法身三種 九十二、清浄行者 九十三、趙州有麼、 九十四、我從賢聖法 九十五、婆子燒庵 九十六、雲門乾屎橛 九十七、林才無位真人 九十八、雪峯三世諸佛 百、生滅、已 九十九、南泉昨夜三更 百一、佛界魔界 百二、八境界

五十則

一、首山竹篋 二、芭蕉拄杖 三、林才劍刃上 四、趙州大蘿蔔頭 五、祖意教意 六、定上座佇立 七、趙州參臨濟 八、四照用 九、大人竟界 十、臨濟遷化 十一、日殺千羊 十二、雪峯透網金鱗 十三、德山入門便棒 十四、兩堂同時下喝 十五、雲門餠餅 十六、以心傳心 十七、劫火洞然 十八、骨包皮 十九、仰山推枕子 廿、兩処不答 雜古則廿七則之内 廿一、汾陽主丈 雜古則廿七則之内 廿二、趙州三轉語 廿三、黃檗看經 廿四、俱胝一指 廿五、破沙盆 廿六、黃檗採菌子 廿七、三帳白紙 廿八、玄沙二種病人 廿九、慈明冬至榜 卅、德山托鉢 卅一、趙州火炉頭 卅二、趙州四門 卅三、三困話 卅四、楊億財寶 卅五、馬祖翫月 卅六、国師三喚 卅七、臺山破婆子 卅八、浮盃無剩語 卅九、趙州洗鉢 四十、再參馬祖 四十一、長沙成佛作祖 四十二、大用現前 四十三、色即是空 又四十三雲門舉 四十四、南泉佛見法見 四十五、普化筋斗 四十六、德山道得三十棒 四十七、臨濟三玄 四十八、普化搖鐸 四十九、瀉山水牯牛 五十、鳥窠諸惡莫作

この久松抱石氏所蔵の『百五十則』中の目錄と前出の大徳寺派の古則目錄文献とを比較対照してみると、両者はともに前百則・後五十則も分かれ、前百則が最後に八境界を含めて百二則となっている点など、ほとんど一致することが知られるであろう。

この『大中寺禅室内秘書 別本丙』と個々の密参の内容までもがほぼ一致するのが松ヶ岡文庫蔵の『百五拾則』（八一〇五九）である。この両者の成立年代は不明であるが、近世初頭までに成立した大徳寺派の

百五十則の伝統に基づいているといえるであろう。

またこの「百五十則」密参録の資料としては、駒澤大学蔵の『百則密参録』（一八八・八一―一九八）と『五十則〔密参録〕』（一八八・八一―九七）の二書である。これらも合して「百五十則密参録」として注意されるべき資料であり、この資料の古則目録はすでに飯塚大展氏によって紹介されたところである。⁽⁴⁾この『百則密参録』と『五十則〔密参録〕』の資料と前出の久松抱石旧蔵『百五十則』や松ヶ岡文庫蔵『百五十拾則』と対照してみると個々の密参の内容において異同が見られるが、基本的な公案群とその順番は同一の形態であるといえる。

さて以上のごとく、大徳寺派系密参録における百五十則の体系が確認されたのであるが、こうした百五十則密参録というものが、常に固定的に室内の実参の場で百則から五十則へと順序通りになされていたわけではなからう。密参録の中には、こうした百五十則の公案体系を踏まえながらもそれぞれの密参録ではより公案数の少ない形で資料がかなり残されている。これらの密参録はその文献の性格上、あまりその年代を明示するケースも少ないのであるが、諸々の密参録の中で、書写年代・成立年代が明らかな文献について以下にその古則名を掲げてみたい。

そこですまず大徳寺一八一世江雪宗立（一六六六年寂）の室内を伝える密参録で扱われる古則について検討したい。松ヶ岡文庫では江雪の密参録としてハ一〇六三・ハ一〇七二・ハ一〇七五との三写本が所蔵されている。ハ一〇六三は表紙右上スミに「江雪和尚 寛永三年六月十二日」とあり、ハ一〇七二も表紙右上スミに「江雪和尚寛永二己丑年」

とある。さらにハ一〇七五もやはり表紙右上隅に「正保二年八月晦日」とあつて右上隅にはやや大きい字で「江雪和尚」とある。これら三写本はいずれも表紙にそれぞれ扱っている古則の目録が記されている。このようにこの三写本は近世初頭の大徳寺派の室内参禅を伝える資料として貴重な意義を有するものといえるであろう。そこでこれらの三写本を前出のハ一五〇の公案群と対照し、該当する百五十則の古則番号を（ ）で示すことにしよう。（ただし「後」とは後五十則、「類」とは碧巖類則を指す）

① 江月宗立密参録（ハ一〇六三）

一、道者家風(67) 一、清浄本分(68) 一、三世諸佛(69) 一、元字脚(70) 一、我從賢聖(94) 一、婆子焼庵(95) 〔雲門乾屎橛(96)〕
一、林才赤肉(97) 一、林才無位真人(97) 〔雪峯三世諸佛(98)〕
一、芭蕉主杖(後2) 一、林才劒刃上事(後3) 一、官人千羊(後11)
一、徳臨棒喝(後13) 一、大随皮肉(後18) 一、混沌未分(後20) 一、馬祖翫月(後35) 一、誰欲招(類2) 一、五帝三皇(類3) 一、雪峯至洞山 一、丙丁童子(類8) 一、拳不顧 一、大用現前(後42)
一、飯袋子 一、衲衣下事 一、枯木龍吟

② 江月宗立密参録（ハ一〇七二）

一、兜率悦三轉語(33) 一、梁武帝問達磨(34) 一、佛眼頌法縁(35)
一、吳雲桃花(36) 一、那吒骨肉(37) 一、徳山参龍潭(38) 一、岩頭古帆(39) 一、香巖擊竹(40) 一、香巖樹上(41) 一、黄檗六十棒(43) 一、雲門露(44) 一、林才云随縁(45) 一、有見無見(46) 一、林才四料揀(47) 一、四賓主(48) 一、拈華(49) 一、二祖断臂(50)

- 一、臨濟四喝(51) 一、不与拘物脱躰現成(56) 一、生死到来(54)
- 一、女子出定(55) 一、心随万境(57) 一、末期一句(58) 一、真正見解(59) 一、瀉山一粒米(60) 一、五家弁(61) 一、孤峯不白(62)
- 一、雲門三句(64) 一、不起一念(65) 一、松源三轉語(66)

③江雪宗立密參録(ハ一〇七五)

- 一、是法住法位(88) 二、趙州有尸(93) 三、我從賢聖法(94) 四、婆子二八女(95) 五、無位真人(97) 六、昨夜三更月(99) 七、佛界(魔界)(101) 八、首山一日拈竹篋(後1) 九、芭蕉(柱杖)(後2) 十、臨才上堂劔刃上(後3) 十一、石室上座 十二、僧問巴陵祖(後5) 十三、定上坐問佛法大(後6) 十四、両□□ 十五、月菴頌坐禪更 十六、松源示滅將衣下

以上が江雪宗立の密參録三点の古則目録であるが、②のハ一〇七二の密參録の場合、ほとんど百五十則の三十三則目から六十六則までの古則にほぼ順番通りに請益がなされていることがわかるのであり、寛永年間においてこうした百五十則の公案体系が成立していたことが確認されるであろう。ただ①のハ一〇六三の密參録の場合は、最初の四則分は前百則の第六七則以降の順番に請益がなされるものの、第七十則以降は前百則・後五十則の順番にほぼ準じながらも省略されていることがわかる。また③の正保二年の密參録では前百則の最後の部分の古則七則分と後五十則の五則が扱われており、やはり百五十則の枠組みとその順番に準拠していることが理解できる。(ただし③の写本はさらに雜則の請益が引き続きなされているが、これらの古則・古語はここでは明示しなかった。)

なお、拙著『中世禪宗文獻の研究』(国書刊行会、平成十二年)において、松ヶ岡文庫本の『百五拾則』あるいは久松抱石旧藏『百五十則』の拈提内容が江雪宗立のそれと類似していることから、『百五十則』は江雪の密參に基づいて成立したと考えたのであるが、百五十則の公案体系は①や③の密參録の古則の取り上げ方を見ると、やはり江雪よりも以前に百五十則の体系があつて、江雪がその準拠して請益をなしていると思われるであろう。したがって大徳寺派における百五十則の枠組みは少なくとも寛永年間以前に遡ることがいえるのではなからうか。

次に江雪宗立と同時代の太徳寺一六九世天佑紹果(一六六六年寂)の密參録を見ることにしよう。この天佑の密參録は松ヶ岡文庫蔵(ハ一〇六四、写本、一冊)で、表紙に右上隅に「寛永十八年八月十八日」、表紙右上隅に「天佑和尚」とあるものである。また表紙には次のような古則が列挙され、本文において各則の密參が記されている。

④天佑紹果密參録(ハ一〇六四)

- 一、佛眼遠報縁(35) 二、那吒太子(37) 三、香巖擊竹(10) 四、阿難問迦葉師兄(42) 五、臨濟隨縁(45) 六、臨濟四料揀(47) 七、趙州大死(52) 八、瀉山有句無句(81) 九、鳥窠布毛(82) 十、東山水上行(84) 十一、大燈三轉(89) 十二、乾峯法身(91)

この天佑の密參録は本文わずか八丁で十二則分しか扱われていないものの、これを百五十則と対照してみるならば、(一)内の百五十則の番号で明らかのように基本的には百五十則中の前百則の公案の中から選択された古則であり、特に第三五則から第五二則、そして第八一則

から第九一則まで古則の中から、順におろ抜いて請益されていたのである。

次に大徳寺一九六世伝外宗左（一六七五年寂）の密参録（松ヶ岡文庫蔵、ハ一〇七一、写本、一冊）は寛文元年から同三年（一六六一—一六六三）に成立したものであるが、その古則は次の如くである。

⑤ 伝外宗左密参録

- 1 雲門殺父殺母、雲門露(44) 2 有見無見(46) 3 百丈野狐(32) 4 兜率三関(33) 5 佛眼遠報緣虚幻(35) 6 龍潭吹滅(38) 7 巖頭古帆未掛(39) 8 香巖樹上(41) 9 迦葉刹竿(42) 10 四賓主(48) 11 臨濟四料揀(47) 12 世尊拈華(49) 13 臨濟四喝(51) 14 趙州大死底(52) 15 黃龍三関(53) 16 雲門生死到来(54) 17 文殊是七佛師(女子出定)(55) 18 脱躰現成(56) 19 心随万境(57) 20 遠録公末期一句(58) 21 瀉山一粒米(60) 22 五家弁(61) 23 応無所住(63) 24 雲門須弥山(65) 25 松源三轉語(66) 26 道者家風(67) 27 長水清浄本然(68) 28 三世諸佛不知(69) 29 趙州地獄(70) 30 翠巖眉毛(71) 31 趙州牆外底(72) 32 雲門普(74) 33 婆子燒庵(95) 34 臨濟無位真人(97) 35 臨濟識得拄杖子(後21) 36 俱胝一指(後24) 37 破砂盆(後25) 38 黃檗株菌子 39 大虫(後26) 40 玄沙三帳白紙(後27) 41 慈明冬至勝(後29) 42 靈雲混沌未分

この伝外宗左の密参録の四二則も江雪や天佑と同じく前百則の第三二則から第七四則あたりを中心に取り上げられ、若干順序は前後する箇所もあるが、基本的には百五十則の公案体系を踏まえたものであることは明らかであろう。

松ヶ岡文庫にはこの他に『大徳派密参録』（クハ一二四一、写本、一冊、扉には「大徳寺派密参録 公案三十二則」とある。）、『禪法古則』（四冊、写本、ハ一〇六八）が所蔵されている。

この中は『大徳派密参録』は書写年代は不明であるが、近世初頭以前の比較的古い写本と思われる。その三十二則とは次のようなものである。

⑥ 『大徳派密参録』（クハ一二四一）

- 一、柏樹(1) 二、地獄(3) 三、萬法(2) 四、五躰六根(6) 五、身心不二(9) 六、生死根源(5) 七、阿誰(16) 八、岩頭古帆掛(39) 九、本来面目(14) 十、一子出家(24) 十一、即心即佛(?) 十二、清淨行者(92) 十三、萬里一條鉄(8) 十四、丹霞木佛(15) 十五、拈花微笑(49) 十六、狗子佛性(18/19) 十七、見明星悟道(26) 十八、香巖擊竹(40) 十九、一字不説(20) 廿、達磨無功德(34) 廿一、黃檗禮拜(23) 廿二、耽源設齋(22) 廿三、正法眼蔵(?) 廿四、南泉猫児(7) 廿五、百丈野狐(32) 廿六、無業莫妄想(28) 廿七、平常心是道 廿八、鑊湯無冷處(13) 廿九、二祖安心 卅、洛浦牢関 卅一、生死到来(54) 卅二、寒暑到来 卅三、萬法帰一 卅四、馬大師不安 卅五、智門蓮花 卅六、斬釘截鉄(10) 卅七、主杖子 卅八、世諦佛法 無二 卅九、一物不将来(27) 四十、寂滅為樂(100)

また四冊本の『禪法古則』に所収される密参録の中、第一巻と第三巻では次のような古則が取り扱われている。

⑦ 『禪法古則』（四冊、写本、ハ一〇六八）の中の第一巻

- 1 十五境界(102) 2 栢樹子(1) 3 萬法話(2) 4 地獄話(3) 5 五

鉢六根(6) 6 猫児話(7) 7 阿誰話(21) 8 生死根源(5) 9 萬里一條鉄(8) 10 身心不二話(9) 11 隨緣消旧業() 12 斬釘截鉄(10) 13 志一字(11) 14 消滅滅已寂滅為樂(100) 15 應無所住而生其心(63) 16 世尊一字不説(20) 17 趙州元字脚(入地獄)(70) 18 兜率三轉語(33) 19 臨濟四喝(51) 20 婆子燒庵(95) 21 女子出定(55) 22 一大事因縁 23 佛眼遠禪師頌(35) 24 鑊湯無冷处(13) 25 耽源設齋(他心)(22) 26 全鉢作用 27 無業莫妄想(28)

⑧『禪法古則』(四冊、写本、ハ一〇六八)の中の第二卷

一、栢樹變通 并請益(1) 二、万法請益(2) 三、地獄請益(3) 四、靈雲見桃花請益(36) 五、香巖擊竹請益(40) 六、見明星請益(26) 七、達磨聖諦請益(34) 八、牛窓樞請益(21) 九、馬大師不安請益 十、斬釘請益(10) 十一、汾陽主丈請益(下21) 十二、岩頭古帆請益 (39) 十三、香巖樹上請益(41) 十四、普化街請益 十五、四喝請益 (51) 十六、水牯牛(下49) 十七、拈花微笑(49) 十八、徹翁舌頭 十九、三玄三要(下49) 廿、興化安樂法門 廿一、龐居士難、請益 廿二、馬師翫月請益(下35) 廿三、兩処不答請益 廿四、□州祖化主□ 宗 廿五、我從賢聖法(94) 廿六、玄沙三帳白紙請益 廿七、岑大虫 成佛請益(下26)

これらの密参録で扱われている古則は、最初の部分では百五十則の冒頭の古則とほぼ一致し、それ以降は随意に百五十則の枠組みから選定され、特に前百則の中から選ばれている。

以上が管見による密参録の扱う古則について検討したのであるが、さらに禅門以外の密参録資料として注目されるのが、天台真盛宗総本

山西教寺(滋賀県大津市坂本)蔵の密参録資料である。西教寺の書庫には天台以外の数多くの典籍が収められており、この中「禅宗一番箱」にはいくつかの洞門門参や臨済宗系の密参録が収められている。この中書名不明の写本には「西覚院豪盛僧正心地修行印可」として「栢樹子話」や「父母未生以前」についての室内商量も記され、天正年間における天台僧の大徳寺派への参禅の様子も収録されている注目すべき資料である。本書の末尾には「慶安貳年二月吉日法印舜興蔵(印)」とあり、近江栗津の観音寺舜興によって一六四九年に書写されて西教寺に収められたのであるが、本写本には最初に四十二則分の大徳寺派の密参が伝えられている。その四十二則とは以下のごとくである。

⑨西教寺蔵密参録

一、栢樹(1) 二、万法不侶(2) 三、地獄(3) 四、身心不二(4) 五、五鉢六根(6) 六、生死根源(5) 七、無功德(34) 八、即心即佛 (12) 九、一字不説(20) 十、誰(21) 十一、趙州無(18) 十二、殺父殺母(44) 十三、西江水 十四、樹上(41) 十五、萬里一條鉄(8) 十六、拈花微笑(49) 十七、人境 十八、無業和尚(28) 十九、古帆未掛(39) 廿、牛窓樞(21) 廿一、丹霞木佛(15) 廿二、夢 廿三、迷故三界 廿四、平生受用 廿五、道者家風(67) 廿六、大用現前(42) 廿七、父母未生(14) 廿八、真正見解(59) 廿九、本分(102) 三十、現成(102) 卅一、色相(102) 卅二、截断(102) 卅三、直指(102) 卅四、為人(102) 卅五、賊(102) 卅六、機(102) 卅七、大人境界(下9) 卅八、忠國師テ日没斎(22) 卅九、債女離魂(25) 四十、黄檗六十棒(43) 四十一、南泉猫子(7) 四十二、大死底(52)

ここに示した目録の最後には「紫野密参録受用 春屋」とあってこれが明らかに大徳寺派の密参録であることが確認される。この資料では古則数はやはり百五十則よりかなり少ない四十二則であるが、冒頭の六則までは百五十則に合致し、また八境界の拈提も含め、やはり基本的には百五十則の前百則の中から本則が選定されていることが理解できるであろう。このように最初の五―六則目までの公案はある程度一致し、その後は比較的百五十則の中でも特に前百則を中心に選択されているのは前出の密参録の⑥⑦⑧の場合と同じ傾向であるといえるであろう。

なお、この西教寺の大徳寺派密参録の最後の部分(三八丁裏―三七丁裏)には「関山派之古則」として「不起一念話」・「誰話」・「本来話」・「地獄話」・「兜率ノ三関」・「万法皈スニ話」の六則分の密参が記されている。大徳寺密参録では、関山一派の妙心寺系の密参を引用したりすることはあまり見られず(逆に妙心寺派の密参録では「徹派」としてその密参を引用する例は幾つか見出せる)、その意味で貴重な資料ではないかと思われる。

さて、以上のごとく幾つかの大徳寺系密参録を検討してきたのであるが、近世前期の大徳寺派においては、この百五十則における公案体系が室内の公案商量の基本的な枠組みとしてあって、実際の参禅においてはその枠組みの中から比較的自由に選定されていたといえるであろう。

なお現存の文献について管見する限りではあるが、大徳寺派の場合、百五十則について、本則のみを記した公案集は少なく、具体的な商量

を示した密参録がほとんどである。この点で妙心寺派の場合とは差異が見られるようである。すなわち妙心寺派の場合、後述するように本則のみを列挙する場合とその本則に対する請益・商量を伝える文献とが共に見出されるのであるが、大徳寺派の場合、公案本文だけを記してまとめたものについては今のところ管見する限りでは西教寺蔵の『古則双紙』(禅宗一番箱、写本、一冊)を知るのみである。

以上百五十則を中心にした大徳寺派の密参について言及したのであるが、大徳寺派の密参録には、いわゆる「碧巖録密参」や「臨済録密参」・「雲門録密参」といった典籍も残されており、室内商量においてこれらの公案集が参禅の課題として大きな位置を有していたことはいうまでもなからう。このことは大燈下の妙心寺派(関山派)においてもやはり共通した状況をみる事ができるが、こうした資料の検討については他日を期したい。

二、妙心寺派で扱われた公案について

前節で検討した大徳寺派の密参録に対して、同じく大燈国師の流れを汲む関山慧玄の一派、すなわち妙心寺派において、如何なる公案集、あるいは密参録が成立していたのであろうか、以下に検討してみたい。前述のごとく妙心寺派においても『碧巖録』や『臨済録』に対する室内参禅が盛んに行われていたのであるが、大徳寺派の百五十則に対応するような妙心寺派独自の公案群が成立している。これはいわゆる「碧前碧後」といわれる公案集であり、これはあくまで碧巖百則を中心としながら、碧巖の前後に公案群を設けて参禅の体系化がなされたもの

であつた。この伝統は近代の臨濟禪にも影響を及ぼしており、この「碧前碧後」に扱われる一群の公案群はさらに増広されて『宗門葛藤集』二八二則の中に取り込まれているのである。すなわち後述するように、「碧前碧後」で用いられる古則について、単に古則目録上ではなく、その本文についてそれぞれ比較対照してみると、同一名の古則であっても、例えば『無門関』のような一般的公案集の本則と異なっている場合もあるが、こうした場合やはり「碧前碧後」の本則が『宗門葛藤集』にそのまま受け継がれていることが確認されるのである。このような「碧前碧後」から『宗門葛藤集』へと形成されていった点については、すでに鈴木省訓氏によってその対照研究がなされている。

この「碧前碧後」は『金屎集』とも呼ばれ、例えば中世末から近世初頭に位置する曹洞宗の乾国泰舒（長源寺二世「福島県いわき市」）はその代語集において、「宗門金屎集」として「関山賊機話」を引用し次のように拈提している。

宗門金屎集

三月三日

栢樹子ノ話^{クワン}関山和尚在^ニ賊機^ト。多、拳^ニ唱^ノ這个公案^ヲ為^ニ栢庭妙斲異號^ト。師拈提ノ處。請諸人如何弁驗^{セン}坎。着語打地云、総跡生也。弋、明眼ノ衲僧難^ニ開^レ口^ヲ言^フ、百花叢中鶯^ス報^ス春意^ヲ。仏法大明录

（四丁裏）

このように近世初頭の洞門僧が上巳節にちなんで大衆に提起した本則が臨濟宗の関山慧玄の則であつたことは注目すべき点であらう。というのも洞門代語集では中国臨濟宗や絶海中津などの五山系の語録から本則の素材を取る場合は多く見られるが、関山をはじめとする妙心

寺派の禅僧からの引用はこの乾国以外には見ることはできない。（ただし大燈国師の語録からの引用は若干見られる。）

乾国泰舒の年代は不明であるが、総寧寺十九世大淵文利（二六三六年寂）の代語集の頭注に「乾国七年忌」（上、十一丁裏）とあり、この代語の年代が元和八年と推定されることから、元和三年（一六一七年）の示寂と考えられる。また『乾国代』におけるこの『宗門金屎集』の引用は乾国の大圭院（福島県三春町）・長源寺（いわき市）住持時代以前の箇所である。したがってこの『金屎集』は少なくとも慶長年間までに洞門資料にもその存在が確認されることになり、またその書名も「宗門金屎集」となっていたことがわかる。

この『金屎集』（あるいは「碧前碧後」）の公案集としての特徴であるが、基本的には「碧巖録」と重複せず、あくまで碧巖百則を中心にしてその前後に位置づけられた公案体系であるが、この「碧前碧後」という公案集が「碧巖録」・「無門関」などと異なる点は、本則に対する後人のコメント・拈提も加えられてその商量の対象となつていくという点である。例えば「趙州栢樹子話」に対する関山慧玄の賊機の語、また南岳磨輒の話には「松源普説」「大慧宗杲普説」としてその拈提が引用されている。このような例は比較的重要な公案に対してのみ見られるのであるが、単に諸々の公案を本則として集成するのではなく、一つの公案に対する重層的な拈提を見ることができる点で一種独特の構成であるといえよう。

また『無門関』四十八則の多くの公案はこの『金屎集』に扱われているものの、必ずしも『無門関』からの引用とは認められない場合も

見られる。例えば趙州栢樹子話について『無門関』と『碧前碧後』の本則は次の如くである。

① 趙州栢樹子話

【『無門関』第三十七則】

趙州因僧問、如何是祖師西來意。州云、庭前栢樹子。

【『碧前碧後』】

趙州因僧問、如何是祖師西來意。州云、庭前栢樹子。(A)

僧云、和尚莫將境示人。州、我不將境示人。僧云、如何是祖師西來意。

州云、庭前栢樹子。(B)

後來法眼問覺鐵嘴嗣趙州云、承聞先師有栢樹子先師有栢樹子話、是否。

背云、先師無此語。莫謗先師好。眼云、眞獅子兒能獅子吼。(C)

この『碧前碧後』の本則は(A)までは『無門関』と重なるが、(B)までを含むのは『趙州録』や『五燈会元』の『趙州章』、そして(C)の部分は『五燈会元』の『慧覺章』に見出せる。したがって『碧前碧後』の『栢樹子話』に関する出典としては『無門関』ではなく、『五燈会元』であり、それも『趙州章』と『慧覺章』とを合採したものであるが、実はこの本則は『大燈百二十則』の栢樹子話の本則と同じである。このように『碧前碧後』に扱われる古則の中で『無門関』と同じ古則名を有するものでも、これが『無門関』から直接採用したとはいえないケースが確認され、これを『宗門葛藤集』の本則と比較すると、『碧前碧後』の本則を継承していることがわかる。

また古則の中に大燈国師(宗峰妙超)・関山慧玄・徹翁義亨の語が本則として引用されている点も注目される。(例えば『大燈国師三轉語』・

『関山賊機話』・『靈山徹翁和尚遺誡』の如き則である。)

またこの『碧前碧後』の場合、その公案のみを記した場合と、公案に対する一々の著語、解釈・見解を示した密参録の場合とがあり、前述のように大徳寺派において公案の本則のみが記される場合がほとんどないのと対照的である。

そこで、この『碧前碧後』で扱われる公案が如何なるものであるか、を検討する前に、これらの本則について記す文献を以下にまとめてみることにしたい。

【古則集】

①『金屎集』、西教寺藏(禪宗一番箱)、写本、一冊、扉に「金屎集目錄」。目錄は四丁分、本文は三三丁分。全一三八則分が収録される。跋に「江州栗太郡芦浦觀音寺舜興藏 慶安二年八月日」とある。⁽¹⁰⁾

②『碧前碧後』、駒澤大学藏(一四九・一五)、写本、上下二卷二冊、上卷二三丁、下卷各卷冒頭に「碧前頌」・「碧後頌」があり、例えば「本來・阿誰・須彌山 即心即佛・放下著」云々と七言の定型詩の形で目錄が示されている。上巻の跋文に「文化九年壬申冬碧前百則命于瑞戒二子膳寫焉秘在於隣花書藏矣 現住江山祖成拜書(印)(印)」とあり、下巻の跋文にも「文化九年壬申冬碧後六十則命于戒子寫之秘在隣華書藏矣 現住江山祖成謹誌(印)(印)」とある。江山祖成は妙心寺の塔頭寺院である隣華院(慶長四年南化玄興の退居庵として創建)の九世。なお上巻の本文冒頭に「金屎」とある。また下巻二五丁裏には「夾山死蛇」等の一九則分の目錄と本則が付加されており、下巻の本則数は八三則となっている。

③『金屎集』、駒澤大学蔵（二四九・一六）、写本、一冊、六九丁。

本写本はいわゆる本則としての公案に抄や著語がしばしば引用されている点で他の資料と異なる価値を有している。例えば「東西自在」の則（三七丁裏—三八丁表）、すなわち「慈明圓禪師冬至日榜僧堂前」云々の古則では「普灯抄云」・「或抄云」・「横岳開山云」・「敬仲和尚云」・「大灯下語ノ曰」というようにさまざまな抄や下語が公案本文と同じ形態で列挙されている。

④『碧前碧後』、真田宝物館松代文庫蔵、写本、一冊、六一丁。冒頭の一二丁に目録が付され、碧前七十九則（一二丁表）、碧後六十六則（一二丁裏）の古則名が列挙されている。しかしこれは本文の順番とは一致せず、本文では碧前碧後の各則が混然となつて記されている。

以上が古則のみを記す文献である。次にこの本則に対して師家と学人の模範的な応酬を記した密参録について資料的にまとめてみることにしよう。

【密参録】

⑤—イ「碧前六十四則」、松ヶ岡文庫蔵『碧前六十四則、碧巖八十五則上』（クハ八八三・三）に所収、写本、一冊、本書は大徳寺派・妙心寺派の諸密参録を集成して浄書した八冊の『古則密参録』（箱帙の題簽。帙の横には「禪公案密参録」とあり。）の第三冊目。「明上座本来面目」から「丹霞木佛」までの六四則分の公案の本文と師家と学人の商量を記す。

⑤—ロ「碧後六十九則」、松ヶ岡文庫蔵『碧巖一五則 碧後六十九則』（クハ八八三・四）に所収。写本。一冊。前出「①—イ」の八冊の『古則

密参録』の第四冊目。「瑞岩主人公」から「一休極意」までの六十九則分の商量を記す。

⑥『禪宗密参録 碧前五十六則』・『禪宗密参録 碧後百十一則』、松ヶ岡文庫蔵（クハ・八九二、クハ八九三）、写本、二冊、「碧前」二八丁、「碧後」四一丁。「碧前」の本文第一丁冒頭では「碧前目録」の前に「劔刃上」の密参が記されている。

⑦『碧前碧後臨濟録密参』（題簽）、松ヶ岡文庫蔵（クハ八八一）、写本、一冊、九一丁。

碧前の五十六則、臨濟録五十二則、徹翁派十四則、特芳示俗漢底本則十則が所収され、その密参が示されている。

⑧『碧前』・『碧後』、松ヶ岡文庫蔵（クハ八八四・一一二）、写本、二冊。「碧前」は八七丁で本則は五五則、「碧後」は一三八丁で百六則。本写本では「碧前」の巻冒頭に、密参録中で用いられる人名・派名として「国師」（本光国師＝大休宗休）・「亀下」（亀年禅愉）・「悟谿派」・「徹翁派」・「洞下了菴」などが掲げられ、これらに対する説明が付されている。本書はこうした関山派の中でも特芳下の大休派の密参を中心に、数多くの他派の見解が対照されている。

ところでこうした妙心寺派の本則集や密参録では如何なる古則が扱われているのであろうか。そこでまず西教寺蔵の妙心寺派古則集について見てみたい。この西教寺には先の大徳寺派密参録の他に「金屎集」が所蔵されており、これは一三八の本則の原文を列挙した文献となつていある。

1 六祖本来 2 雲門須弥山 3 大梅即心即佛 4 阿誰話 5 趙州地獄

6 放下着 7 兜卒三関 8 黄龍三関 9 松源三関 10 万法不侶 11 七
 佛偈 12 古徳口是禍門 13 香巖擊竹 14 一字不説 15 靈雲見桃華 16
 趙州柏樹子 17 関山同有賊機 18 南岳説似不中 19 百丈野狐 20 大梅
 西来無意 21 峯庵破沙盆 22 寐恒一 23 摩拏羅傳法偈 24 阿難應諾
 25 別峯相見 26 虚堂三轉語 27 丹霞木仏 28 黄檗三捨 29 世尊拈花
 30 華嚴四法界 31 南泉油糍 32 南泉土地 33 慈明婆 34 息耕頌 35
 佛魔話 36 趙州無 37 中峯因甚道話 38 慈明屋倒 39 法身三種話 40
 香巖樹上話 41 樹上意旨 42 婆法燈未分公案 43 性空井中天 44 大梅
 子 45 婆子燒庵 46 婆子勘破 47 古徳孤峯不白 48 懶安有句無句 49
 法眼二僧捲簾 50 麻谷鋤草 51 徳山托鉢 52 同無意 53 洞山無寸草
 54 玄沙不往西天 55 石霜竿頭上 56 古徳張公酒 57 興化四方八面 58
 吳雲兩処 59 國風吹其船 60 竹篋背舂 61 五祖牛窓櫺 62 債女離魂
 63 本有圓成佛 64 清浄破戒 65 法演虚空五字 66 孤帆未掛 67 慈明虎
 声 68 女子出定 69 廣惠陣□□上 70 雲門扇子 71 滄仰微細流 72 虚
 堂五逆雷 73 黄龍鐘楼上 74 香林室内灯 75 雲門蘓羅 76 洞山包含万
 有 77 麻谷紙帳 78 南院啐啄 79 法雲茄子瓠子 80 馬祖不少塩醬
 81 虚堂主丈品 82 疎山寿塔 83 五祖演谷呱 84 大灯轉語
 85 洞山土地 86 龍潭紙觸吹滅 87 首山低聲 88 徳山作广生 89 庵
 主拳頭 90 三團九割 91 深入禪定 92 惠附日耶 93 古徳不爭人我 94
 興化罰錢 95 紙上張公 96 庭豎聞桂 97 芭蕉主丈 98 南陽三喚侍者
 99 夾山不説宗門 100 古徳同耶別耶 101 虚堂行吊桃列 102 異類中行 103
 乾屎橛 104 百丈餓死 105 無功德 106 雲門失通 107 五家弁 108 古徳理致
 機関 109 敲山陸芍薬楨摘 110 拳手動足 112 佛殺生 113 雲門披七条

114 田三恵 115 五戒 116 仰山拈鏡 117 慈明水盂語 118 雲門露 119 徳山卅
 棒 120 洞山三頓棒 121 磨輒打車 122 慈明連喝 123 馬防喝 124 黄檗三頓
 棒 125 寶主歷然 126 百丈再三 127 臨濟四喝 128 臨濟四料揀 129 臨濟迂
 化 130 臨濟栽松 131 興化同参 132 三玄三要 133 無位真人 134 真正見解
 135 四賓主 136 身心不異 137 滄山水牯牛 138 水上行

このように西教寺蔵『金屎集』では全一三八則が通し番号となつて
 古則が列挙されており、ここにはいわゆる碧前碧後という概念が見ら
 れない。

また駒澤大学蔵『金屎集』の古則の配列も同様である。本写本には
 目録、あるいは古則本文における古則名が明示されていないが(ただし
 部分的に古則名は付されている)、他の「碧前碧後」の文献と対照しなが
 ら古則名を列挙すると次のようになるであらう。

1 本来面目 2 阿誰 3 雲門露 4 即心即佛 5 庭前栢樹子 (6 関
 山賊機) 7 万法不侶 8 見桃花 9 雲門栢樹子 10 趙州狗子 11 了贊
 頌 12 有句無句 13 兜率三関 14 黄龍三関 15 百丈野狐 16 業障空
 17 混沌未分話 18 徳山托鉢 19 一物不将来放下 20 水上行東山 21 乾
 峯法身 22 香巖樹上 23 須弥山話 24 婆子燒庵 25 臺山婆子 26 滄山
 水牯牛 27 牛窓櫺 28 官人無鬼 29 地獄話 30 一盞燈 31 古帆未掛
 32 孤峯不白 33 曹山死屍 34 擊竹悟道 35 大力量人 (36 黄檗三捨)
 37 乾峯一路 38 債女離魂 39 本有圓成佛 40 臨濟三問 41 洞山三頓棒
 42 疎山壽塔 43 撲破鏡 44 紫王鬼国 45 慈明連喝 46 興化古廟 47 寂
 子微細 48 石霜仏魔 (49 百丈再参) 50 未了公案 51 鐘樓念讚 52
 南岳磨磚 53 麻谷紙帳 54 維摩福田 55 馬祖不少塩醬 (56 百丈開田

大義) 57法雲華山 58法堂三轉語 59虛堂四能 (60南泉喚院主)

(61世尊在忉利天) 62西河獅子 63性空一寸繩 64興化四討錢 65

兩歲竹篋 66世尊拈華 67万里無草 68廣惠鉄竜 69慈明水盆話

(70興化) (71虛堂上堂) (72雲門鐘声七条) 73女子出定 74

主人公 (75五祖西来五字) 76無善亦無憂 77首山低声 78迦葉刹

竿 79趙州勘庵主 80石霜竿頭 81張公喫酒 82国師三喚 83東西自

在「慈明冬至勝」 (84德山未跨棒) 85紙燭吹滅 86南院啐啄同時

87不下山 (88馬防序) (89無位真人) (90臨濟賓主歷然) 91

四料揀 (92臨濟四喝) (93臨濟全体作用) (94臨濟驢馱却)

(95張拙秀才) (96華嚴四法界) (97中峰四法界) (98鹿門守

廓侍者) (99異類中行) (100洞山土地神) (101碧巖序) (102

一字不説) (103楞嚴第一寐恒一) (104大燈三轉語) [以下省略]

この古則名はあくまで仮のものであるが、いずれにしてもこの『金屎集』において碧前碧後という觀念が特に見出すことはできない。

なお、四四丁表には「龍牙是曹洞下尊宿若是德山林際門下別有生涯碧十則」とあつて、『碧巖録』からのものであることが指示されており、事実『碧巖録』第二十則の評唱の中にこれが確認される。

一方、こうした典籍に対して碧前碧後の觀念が明らかになっているのが、駒澤大学蔵の『碧前碧後』二巻と真田宝物館蔵の『碧前碧後』である。前者は上巻が碧前、下巻が碧後として分冊され、各巻頭に七言の詩文形式の目録が付され、本文ともこれが一致する。ちなみに七言の目録とは次のようなものである。

碧前頌

本来・阿誰・須彌山即心即佛・放下著

兜率三關・見桃花 栢樹・黃龍・主人公

婆子勘破・趙州獄 兩處・孤峰・牛窓櫺

三種・死心・香巖樹 鵲啼處・乾屎橛 (以下略)

一方後者は冒頭の一丁表に「碧前」として七九則の古則名が掲げられ、一丁裏に「碧後」として六六則の古則名が掲げられている。

碧前

六祖本来 阿誰 須彌山 即心即佛 一物不将来 兜率三關 見桃花

趙州栢樹子 黃龍三關 瑞岩主人公 臺山婆子 趙州地獄 混沌未分

兩處不答 孤峯不白 牛窓櫺 乾峰法身 山谷悟処 香巖樹上 出

庵鵲鴿 乾屎橛 雲門蘿喲 德山托鉢 密庵托鉢 万法不侶 清淨行

者 竿頭上 香巖擊竹 摩拏羅傳法偈 債女離魂 雲門露 破沙盆

忠国師三喚三応 有句無句 南泉斧鎌鎌子 百丈野狐 関山栢樹子 二

僧捲簾 西来五字 七賢女 吹其舩舫 無鬼論 室内一盞灯 黃檗三

捨 達广不來東土 丹霞木仏 寤寐恒一 趙州無 曲直一則 了贊頌

中峰八個 大惠無未答 透徹 東山水上行 深入禪定 大通仏 黃竜

鐘樓上 馬祖塩醬 栢樹托鉢同別 張公喫酒 鼓山冤讎 一失人身

低声、 興化古笛裡或卒風藤雨 又村原語 水牯牛 孤帆未掛 異類中行 無功

德 千尺井中 西来無意 法灯未了公案 南泉油糍 或庵西天 芭

蕉拄杖子 世尊不説 口是禍門 莫妄想 百丈不食 目連地獄 (碧

後は略)

しかしながら本則の部分を確認してみると、古則の配列は必ずしも目録の順番ではなく、各本則に「前」「後」という頭注が示されている

のみであり、冒頭の目録で碧後として位置づけられている古則も前半部に配置される場合も多く見られるのである。

こうしてみると実際の密参においては必ずしも碧前碧後という公案体系が妙心寺派の室内参禅において絶対的な拘束性を有するものではなかったことを示唆するものと考えることができる。

次にこの「碧前碧後」の密参録資料についても扱われている古則について見ていきたい。紙面の都合もあってここでは前出の碧前碧後密参録の⑤「イ」「碧前六十四則」(松ヶ岡文庫蔵『碧前六十四則、碧巖八十五則上』「クハ八八三・四」に所収。)と⑤「ロ」「碧後六十九則」(松ヶ岡文庫蔵『碧巖一五則 碧後六十九則』「クハ八八三・四」に所収。)の目録を提示したい。

⑤「イ」「碧前六十四則」の目録

上巻

- 一、明上座本来面目 二、東山阿誰 三、不起一念 四、雲門乾屎橛
- 五、趙州栢樹子 六、関山栢樹子 七、萬法不侶 八、東山水上行
- 九、見桃花悟道 十、兜率三関 十一、趙州狗子 十二、西来無意 十三、即心即佛 十四、非心非佛 十五、放下著 十六、混沌未分 十七、岩頭古帆 十八、香巖樹上 十九、破砂盆 廿、孤峯不白 廿一、婆子燒菴 廿二、有句無句 廿三、婆子勘破 廿四、黃檗三捨 廿五、黃龍三関 廿六、百丈野狐 廿七、前言後語 廿八、德山托鉢 廿九、本有圓成佛 三十、曹山絶氣 卅一、乾峰三種病 卅二、地獄 卅三、紙燭吹滅 卅四、四喝 卅五、佛魔 卅六、芭蕉拄拄杖 卅七、二庵主勸弁 卅八、興化入室 卅九、無位真人 四十、乾峰一路 四十一、

- 洞山三頓棒 四十二、首山竹篋 四十三、四料揀 四十四、從上諸聖 四十五、臨濟栽松 四十六、大力量 四十七、室内一盞灯 四十八、一切罪業 四十九、楊岐問慈明 五十、百丈三日耳聾 五十一、瞎滅驢却 五十二、慈明虎声 五十三、性空西来意 五十四、臨濟四賓主 五十五、虚堂小参 五十六、鐘声七條 五十七、長公喫酒李公醉 五十八、昔人写照詩 五十九、世尊拈華 六十、瀉山水牯牛 六十一、迦葉刹竿 六十二、牛過窓櫺 六十三、疎山壽塔 六十四、丹霞木佛
- 右 從此碧岩

⑤「ロ」「碧後六十九則」の目録

- 一、瑞岩主人公 二、破戒比丘 三、洞山示衆 四、慈明一盆水 五、興化同参 六、南泉油糍 七、国師三喚 八、摩拏羅尊者偈 九、雲門示衆 十、于頔失色 十一、唯餘一喝 十二、虚堂上堂 十三、啐啄同時眼 十四、竜牙是曹洞下 十五、臨濟三度發問 十六、朝眉夕肩 十七、異類中行 十八、無鬼論 十九、毘婆尸佛偈 二十、慈明冬至勝 廿一、擊竹悟道 廿二、良遂携鋤 廿三、福州玄沙 廿四、瀉山問仰山 廿五、南岳心印 廿六、虚堂在吳隱 廿七、南岳因六祖問 廿八、仰山住東平 廿九、世尊住忉利天 三十、法雲示衆 卅一、黃竜住黃檗 卅二、女子出定 卅三、寤寐恒一 卅四、不思議不思惡 卅五、洞山土地神 卅六、婆燒菴 卅七、栢樹子 卅八、万法不侶 卅九、洞山三頓棒 四十、犀牛扇子 四十一、慈明本来面目 四十二、南泉斬猫 四十三、五体六根 四十四、見明星悟道 四十五、夢之一字 四十六、万里一條鉄 四十七、設齋話 四十八、身心不二 四十九、一子出家九族生天 五十、生死根源 五十一、色即是空 五

十二、截釘截鉄 五十三、百丈野狐話 五十四、那陀太子 五十五、倩女離魂話 五十六、洞山喫菓 五十七、岩頭古帆 五十八、生死到來 五十九、大用現前不存軌則 六十、世尊四十九年一字不説 六十一、以心傳心 六十二、雲門露 六十三、諸惡莫作 六十四、行脚高士 六十五、向火鉢上轉大法輪 六十六、四種異類 六十七、夢一字 六十八、念佛話 六十九、一休極意

このように密参録においても碧前碧後の公案群はその本則数・配列とともに比較的流動的であることが確認される。いまその本則数について表にまとめるならば次表のごとくである。

古則集		碧前		碧後		本則總數
①金屎集	西教寺	區別	なし	一三八則		
②碧前碧後	駒澤大学	七九則	六六則	一四五則		
③金屎集	駒澤大学	區別	なし	二六二則		
④碧前碧後	真田宝物館	七九則	六六則	一四五則		
密参録						
⑤碧前碧後	松ヶ岡文庫	六四則	六九則	一三三則		
⑥碧前碧後	松ヶ岡文庫	五六則	百一則	一五七則		
⑦碧前碧後臨濟録密参	松ヶ岡文庫	五六則	なし	不明		
⑧碧前碧後	松ヶ岡文庫	五五則	百六則	一六一則		

対照表では本則数においても一三三則から一六一則までの異同が見られることが知られるが、公案の順序においても例えば第一則が「六

祖本来面目」であるのが、①②③④⑤の古則集と密参録、一方「東山阿誰話」であるのが⑥⑦⑧の密参録である。また第一則を「六祖本来面目」とする場合でも「東山阿誰話」を第二則とするのが、先の五例の中②④⑤、第三則とするのが③となっている。このように大徳寺派における密参の初関が主に栢樹子話であったのに対し、妙心寺派の碧前碧後ではこの六祖本来面目・阿誰話が位置づけられていることがわかる。

さてこうした大徳寺派・妙心寺派の百五十則と碧前碧後の公案の体系について検討してきたのであるが、これら両者の見解については一々の密参についてみていかねばならないのであり、また双方の家風を際立たせる対照的な理解もいくつか見受けられる。これらの問題点についてはまた総合的に検討する機会を待つことにしたい。

三、趙州栢樹子話に関する大徳寺派の密参について

さて以上の如く林下の大徳寺派・妙心寺派においては、両派に特有の公案群が選定され参禅体系が成立していたのであるが、これらの多くの公案の中で比較的重要な位置を占めているのが、「趙州栢樹子話」である。これは大徳寺派の室内においては、特に重要な意味合いを有している古則である。例えば大徳寺派の古則集（西教寺蔵『古則双紙』）や諸々の密参録には「千七百則ノ公案版ニ栢樹子ノ話一則」という一句が頻出しており、この句に対して密参において師家が学人に下語を求めるケースや、「弁」として解説文の中に用いられるケースもある。またこの則は後述するように初関としても位置づけられる古則でもある。

る。一方妙心寺派においてもこの古則は重要な意味をもっており、特にこの則に対する関山慧玄の「賊機」の見解はあまりにもよく知られるところである。

そこで以下においてこの「趙州栢樹子話」について、両派の密参録等の資料を提示しながら、中世末から近世初頭の林下の僧たちがこの則をどのように見解を示していたのかを検討してみることにはしたい。

そこでまず最初に、この栢樹子に対する見解を伝える資料として、禅宗以外に伝わった資料、すなわちキリシタン文献と天台系寺院の資料を以下に提示しよう。

まず最初の資料は、元来禅僧でありながらキリシタンとなった不干斎巴鼻庵（ハビアン）が伝える大徳寺派密参録の資料である。ハビアンは永禄八年（一五六五）に京都に生まれ、禅門に投じたものの、天正十一年（一五八三）にキリシタンとなり、その文禄二年（一五九三）にはイルマンとなり、慶長一〇年（一六〇五）にはキリスト教護教書である『妙貞問答』を著している。しかしながら慶長十三年（一六〇八）には棄教し、逆に排耶書である『破提字子』を元和六年（一六二〇）に著している。

ところでこのハビアンによる『妙貞問答』は従来上巻が不明であり、岩波書店の日本思想大系の『キリシタン書・排耶書』では中巻と下巻だけが翻刻されていたのであるが、一九七四年の『史学研究』一二二―一二三合併号の井手勝美氏の「不干斎フアビアン『妙貞問答』上巻禅宗之事について」という論考¹²によって、この上巻の全貌が明らかになっている。すなわちこの上巻の写本はもとと京都吉田家神樂

岡文庫に昭和十三、四年ごろ宮地直一氏によって確認されていたものの、公に発表されないまま時間が経過し、神宮文庫の岩田貞雄氏が井手勝美氏に同写本が天理図書館に所在することを伝え、井手氏によって調査紹介され部分的に翻刻研究もなされたのである。

ところでこの井手氏の研究では『妙貞問答』上巻の（一）「序文」から（十一）「浄土宗之事 付一向宗」の十一項目の中、第十番目の「禅宗之事」が翻刻されており、キリシタン側から見た当時の禅宗の様子を窺い知ることができるのであるが、特にハビアンが大徳寺の密参録について次のように言及していることが注意される。

大徳寺ニテノ蜜参ノ物ヲミセマヒラスヘシ。是ハ、アナタヨリ書テ給タルニテ侍ルソ。僧問「趙州」。如何ナルカ是祖師西来意。弁、意ハ有二似テ無物テ候。拶曰、無キ証拠ヲ弁シ来レ。弁、頭上ヨリ脚下マテ、全体ヲ波ハ皮、肉ハ肉、骨ハ骨、随ハ随、トサキ分テ見トモ、意ト云物ハ色、形モナシ。眼ニミヘヌノミナラス、耳ニモ不聞、鼻ニモカ、レス、下ニモ味レス、身ニモフレラレス、詞ニモ求ラレヌ也。是カ、ナキ証拠テ候。拶曰、無心ナラハ、ヲシヒ、ホシヒ、イトヲシイ、カナシイトモ思モノハ何物ソ。弁来レ。弁、意ハアルニ似タ物テ候。古人云、有非有、無非無。アルニモ着セス、無ニモ着セス。是モアルニ似テ、ナキト云タ語也。又、古人云、心法無形、通貫十方。形ハナケレトモ、唐土、天竺ノ事ヲモ、居ナカラ分別スル程ニ、十方ニ通貫スト云ソ。アルニ似テ、ナイソ。又、古人云、心法ハ如水中月、猶如二鏡上影。水カアレハコソ、人ノ形モウツセ。ソノコトク、人ノ五体六根カアレハコソ、心ト云モノモアレ。別ニ心ト云テハナシ。是

モ有ニ似テナシ。釈迦モ、過去心モ不可得。現在心不可得。未来心不可得。ト説玉フソ。三世不可得ト云タゾ。如此、三世無心トサヘ、トリタラハ、何輪廻モアルマイソ。色相ノアル間ハ、念ト云事モ、ヲコライテハカナワヌ物也。タトヘハ、念ヲ起シタリトモ、明眼ノ上ニテハ輪廻トハナルマヒソ。三世無心ト悟処、干要也。又、古人、心有レハ則曠劫ニ受ニ沉輪ヲ一。心無則刹那ニ成ニ正覺一。心有トハ、迷タル凡夫ノ事ソ。曠劫トハ、一ダシク長キ事ソ。沉輪トハ、生死海ニ沉輪ハテナヒ上ソ。無心トハ、三世無心ト悟タ上ソ。刹那トハ、髪一筋切程ノ間ノ事ソ。ハヤキト云心ソ。成正覺トハ、悟タト云事ソ。

州云、庭前ノ白樹子。

弁、白樹モ心有ニ似テ、ナキ物テ候。拶テ曰、草木ノ上ニ意アルニニテ、ナキ証拠ヲ弁来レ。弁、柏樹ニカキラス、一切草木、悉、春ハ生シ、夏ハ長シ、秋ハ収メ、冬ハカクシ、四時ヲリ／＼ヲ知テ生、老、病、死アリ。又、水ヲソ、キ、ウヘヲカヘハ、ヨロコヒ、花咲、緑ヲイタスソ。又、切ハイタムソ。是ハ有ニ似タソ。サテ、根、茎、枝、葉ヲ打破テ見ハ、中ニ花ノ種モ緑ノ種モナシ。是ハ心カナキソ。是ヲ似テ、西来意ト問タニ、柏樹子ト答話ニ直指セラレ候。古人ノ哥ニ、桜木を碎てみれハ花もなし、花をハ春のうちにもちける。此古則ニヨク叶タルトノ先師已来ノ沙汰ニテ候。下語、柳緑花紅。是モ柳ノ緑モ花ノ紅モ、柏樹ノコトク無心ノ者也。其程ニ、草木モ人心モ有ニニテ、無物ナル故ニ、此句ヲ柏樹子ト云処ニ付タソ。畢竟、三世無心ト云肝要也。拶曰、如此ミル時ハ、無ノ見ニハ落マヒル。弁、無ノ見ニハ落テ候。其故ハ、有モノヲ無ト云、無物ヲアルト云カ、無ノ見也。心ト

云物ハ元来ナキ物也。無物ヲナシトミルハ、正知正見テ候程ニ、無ノ見ニハ落マイ也。是見給ヘ。申ニ及ハヌ事ナカラ、心ト云物ハ、無物ニ是モスミテ侍ルハ。仏法ハ何モ此分ニメツラシカラス。是カ又、万法ノ話ノ密參ノ物ニテ侍フ。サレトモ、ヨミマイラスルニ不及。是モ／＼ト申セハ、時ウツリ侍ルマ、御目ニカクルマテモナシ。

このように大徳寺の密參録として明示している資料であるが、冒頭に「大徳寺ニテノ密參ノ物ヲミセマヒラスヘシ。是ハ、アナタヨリ書テ給タルニテ侍ルソ。」とあることから、ハビアンが大徳寺に參禪して得た密參録をキリシタン入信以降も所持し、これを仏教批判書を著す時点て用いていたことが確認される。また公案の秘訣を書写伝授されているありようを知ることのできるであろう。

ところでこのような『妙貞問答』上巻「禪宗之事」における記述は密參録を文章を直接引用しているのか、あるいは引用であるにしてもどこまでが密參録の引用部分であるのか不明瞭である。しかしながらこの資料を次の西教寺に伝わる大徳寺派密參録と比較してみると、このキリシタン資料が密參録の内容をかなり正確に伝えていることが明らかとなるであろう。

第一

僧問趙州如何是祖師西来意。

弁云、有ルニ似無キ物テ走。拶曰、无キ證拠ヲ弁来。

弁云、頭上ヨリ脚下マテ全体皮ハ／＼、肉ハ／＼、骨ハ／＼トサキ分テ見レ、意ト云物ハ色モ形モナシ。眼ニ見ヘヌノミノミナラス、耳ニモ不聞ヘ、鼻ニ不レ顚レ、舌ニモ不味、身ニモ不觸、言ニモ不覺也。是無ヲ證拠テ走。

撈曰、无心ナラハ、ヲシイ、ホシイ、イトヲシヒ、カナシヒト思フ物ヲ弁来レ。

弁、意ハ有ルニ似タ物テ走。古人云、有ニシテ非レ有、无ニシテ非レ无、有ニシテ不着、无ニシテ不着、是モアルニ似ナキト云語也。又、古人云、心法無形、通貫十方ニ、カタチハ無レ、唐土天竺ノ事ヲモ居ナカラ分別スルホトニ、通貫スト十方ニ云テ有ニ似テ無ヒゾ。又、古人云、心法ハ如水中ノ月、猶如鏡ノ上ノ影。水カアレハコソ、人ノ形モウツセ、去如ニ、人ノ五体六根カアレハコソ、心ト云物モアレ。別ニ心ト云テハナシ。是モアルニ似テナキノ。過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得ト説ハ、三世不可得ト云タソ。如此、三世無心トサヘ、悟タラハ、輪廻モアルマイソ。色相有間ハ、念ヲ起シタリト明眼ノ上テハ輪廻トナルマイソ。三世無心ト悟ルカ肝要也。又、古人云、心有則曠劫ニ受沉輪、心々無則刹那成ニ正覺。心有トハ、迷ヒタル凡夫ノ也。曠劫トハ、一段久キ也。受沉輪トハ、生死海ニ沉輪ハテナヒ羊ソ。無心トハ、三世無心ト悟タ羊ソ。刹那トハ、髪一筋キルホトノ間ノ事ソ。ハヤキト云心ソ。成正覺トハ悟タト云事ソ。

州云、庭前ノ白樹子。

弁云、栢樹ニモ意アルニ似テ、無キ物テ走。

撈曰、草木ノ上ニ意アルニ似テ、無キ證拠ヲ弁来レ。

弁云、栢樹ニカキラス、一切草木、悉ク春ハ生シ、夏ハ長シ、秋ハ収メ、冬ハ藏ル、四季ノヲリノヲ忘テ生老病死アリ。又、水ヲ洒キ、コヘヲカフル菰ヒ、花ヲサキ、緑ヲ出スソ。

又、伐ルニ是ハ意アルニ似タリ。サテ根、莖、枝、葉打破ミレハ、中ニ花種モミトリノ種モナシ。是ハ心無ソ。是以テ、西来意ト問タニ、庭前

栢樹枝ト答話ニ直指セラレテ走。古人歌云、桜木ヲ碎テ見レハ花モナシ、色ヲハ春ノ空モチケル。此古則ニヨクカナフタト先師以来ノ沙汰ニテヒク也。

下語、柳ハ緑、花紅。是モ柳ノ緑トモ花ノ紅トモ、栢樹子ノ如ク無心ノ物也。サル程ニ草木モ人ノ心モ是ニ似テ無物ゾ。故ニ此句ヲ栢樹枝ト云処ニ付タリ。畢竟ハ三世無心ト用ルカ肝要也。

撈曰、如此ミル時ハ、无ノ見ニハヲチマシイカ。

弁云、無ノ見ニハ落マイテ走。其ノ故ハ、アルモノヲナイト見、無キモノヲ有ト云カ無ノ見也。心ト云物ハ元来無キ物也。無キ物ヲナイト見レハ、正智正見ト走ホトニ、无ノ見ニハ落マイ也。無ノ見ノ者ハ死スレハ灰トナリ土トナリテノクルニ何者残テ佛如リ。又、地獄ニ入ハコソ佛法ハ何テモ無イ事ソト云ヲ迷タル者カ死スレハ魂魄カ残テ輪廻スルソ。無記ナイト云カ空見断見無ノ見ソ。古人云、不レ可下起スハ有ノ見ヲ、如スレハ須弥山ノ、起フ無見一、芥子計上。有ノ見ト迷ヒタル凡夫身也。是ハ後生ニ大事ト思テ神ヲイノリ佛ヲ拜ミ堂社仏閣ヲ建立シ僧ヲ供養ルホトニ来世ヲ知識ニ逢ヒ現今生ニテモ知識ニ逢テ事モ有リサルホトニ起無ノ身一、如須弥山云タソ。無ノ見ノ者ハ神モ無ソ。佛モナイソ。何モナイ角モナイト無理ニヤフリ云ソ。是ハ一世ウカム世カナイソ。サルホトニ起無ノ見不レ可芥子計ト云タソ。有ノ見ト無ノ見トクラヘテ見レハ有見ハマシソト云タソ。今日悟道シタル上有ハ有見、無ヲハカマツスクニ見ルカ肝要也。是カ正智正見テ走。

撈曰、正智正見ノ進退ヲハ平生何ト用フソ。

弁云、僧ハミアルノキヤウ俗ハミ有ヘキヤウ仏ハミ、神ハミ、師ハミ

人へく、親へくアカムヘキヲハアカメ此色相ノ上テ有ヘキヤウニ用ル
カ正智正見テ走。是カ柳緑リ花紅也。柳ニ花カサキ花ニ柳ノミトリカ出_{テモ}
異_ラ有ヘキ也。マツスクニ受用スルカ、イタリタ上ソ。無_ノ見ニ落タル
者ハイタラヌ事也。仁義_ハ有ヘキヤウニ用ルカ柳ハ緑リ花ハ紅也。
此用ヒイタリタル上ソ。

このようにキリシタンに伝わった密参録と、天台系寺院に伝わったそれとを対照してみると、細部にわたってほとんど一致していることが確認されるであろう。これはもちろん偶然の一致ではあるまい。両資料を年代的にみるならば、前者の場合、ハビアンが京都で禅門に投じ、僧名恵春（『南蛮寺荒廃記』による。『切支丹宗門来朝実記』では「恵俊」）であった時代に得たものであると考えられるので、キリシタンに転向した天正十一年以前の資料であると考えられる。一方、後者の西教寺の密参録資料は、慶安二年の写本であるが、内容的には天正年間の豪盛僧正の参禅を伝えるものであるから、キリシタン側・天台側ともに天正年間（一五七三—一五九二）頃に大徳寺に参じ、その参禅の過程の中で密参録から書写伝授された結果としてみることができであろう。したがって両者に共通して見られる密参の内容は、十六世紀末期の大徳寺の参禅の商量を反映した資料としてみることができるのであるが、このような驚くほどの両資料の一致は実質的な学人の参禅の中で、学人自身から発する見解というよりも、学人がある程度の境涯に至った時、それまで密々に伝授されてきた模範的な商量が書写伝授されているという事実の証左としてみることができであろう。こうした傾向は以下に見るように密参録の全体的な傾向でもあり、それは密参禅の

限界性を示すものとして考えられるであろう。

なお、この「栢樹子話」について禅門以外の資料で一致するということを可能ならしめたのは無論両者による大徳寺への参禅ということに他ならぬのであるが、同時に大徳寺派における「栢樹子話」という公案そのものの位置づけも考慮すべきであろう。すなわち先に示した大徳寺派の公案目録をはじめ、多くの大徳寺派密参録ではこの「栢樹子話」が最初に列せられている。このことは単なる順番だけの問題ではなく、後述するように密参録自身の商量の中に栢樹子の話が新到学者のための公案として意義づけられており、大徳寺の参禅においても基本的に重要な意味をもつ初関であったのである。したがってキリシタンとなったハビアンにとっても、また天台僧にとっても、まず透過しなければならぬのがこの栢樹子話であったことが、結果的にこのように共通の密参資料を残す状況に至らしめたともいえるのである。さてそこで今日まで伝承されてきた大徳寺系密参録が伝える「栢樹子話」の拈提について見てみよう。

以下に掲げるのは①松ヶ岡文庫蔵『禅法古則』（写本、四冊中の第三冊）、②久松抱石所蔵公開本『百五拾則』の四つの資料である。③『古則密参録』（松ヶ岡文庫蔵、八一〇七六、表紙右上に「要道和尚真跡」とあり）。

①【四冊本『禅法古則』の第三巻】

栢樹變通

△變通_{下語} 柳緑花紅。

師拶曰、柳—意旨如何。答云、柳不緑花不紅。

弁二、柳ノ緑、花ノ紅モヤカテナウナル者也。

師撈云、柳不緑花不紅意旨如何。答云、佛祖不識。

弁、窮則變シ変スル則ハ通ス。一切森羅万象皆本分ヨリ生ノ又モトノ本分ニヤカテカヘルモノ也。今マテナニモナケレトモ又生スル者也。花モ落テナケレトモ春又生ス。一日モ窮リツキテ又次ぎノ日カ生スルモノナリ。又一年モ大晦日マテキワマツテ又正月カラ生スル者也。現成ノ上ハ自然ニ如此何ノ道理モナキ上仏祖モシラザル也。

同 請益

△師撈云、意ト云モノハ根源カ有ルモノカ落居カアル者カ。答云、根源モ落居モ二ツ共ニナイモノチャ。サセニナレハ意ト云モノハ落居モ有テコソ。

○師撈云、意ノ真ケナイセウコカアラウ弁セヨ。答云、意ハ元来相名カナイモノチャ。ホトニ是カナイセウコ也。

○師撈云、意ハチャツ／＼ト生スルカ、ドコニ収ルソ。答云、意ハ元来ナイ処ヨリ生シテ、ナイ処ニヲサマルモノ也。

○師撈云、意ニ付テ先師ノ時現有本無ト云弁アリ、如何。答云、現有ト云ハチャツトアリ。本無ト云ハ元来ナシ。有テナイト云タ弁ト同。

○撈云、意ハ有テナイモノト云弁ハ古ヨリ弁也。近代別ニ古岳東溪大弘へ被呈タル弁アリ。答云、有ルニ似テナイモノチャ。是ハ意ハ元来ナイホトニ此弁親シト大弘云也。

○先師ノ一撈云、意ハ元来ナイト弁スルトキハ無ノ見ニハヲチマイカ。答云、根本ナイモノヲナイト見、有ルモノヲ有ルトミルハ驚直也。無ノ見ニヲチマイソ。ナイモノヲ有ト云イ、アルモノヲナイト云ハ邪見

也。是ハ無ノ見ニ可落ナリ。

○先師ノ撈意云意ハ身ノ為ニハ什麼ソ。答云、用テソロ。鉢ニ用ハ添テアルモノ也。鉢ハ身ナリ。影ハ用ナリ。

○現成ト色相トヲ弁シ分ヨ。答云、同色相ノ中テモ一則心得タ上テ生死ヲ截斤シタレハ則現成ナリ。生死ノ截斤セス迷イ輪廻スル処ハ色相也。同シ現成トイヘトモ草木ノ中テハ毎年花サキ實ノルハ色相也。根ヲキツタ立テ花ハ真ノ現成。イツレモ輪廻シタル処ハ皆色相。〃モリンエセサレハ現成也。ナセニナレハ色相モ本分ヨリ現成シタモノ。又現成ノ上モ本分ヨリ現成シタモノ也。迷ウタヲ色相ト云イ、悟タヲ現成ト云。

○有心ノ現成、無心ノ現成。有心ノ色相、無心ノ色相。

弁二、無心ノ現成トハ善知識ノ上也。道理ナシ。有心ノ現成トハ凡夫也。有心ノ色相トハ凡夫ノ迷タ上也。無心ノ色相トハ善知識也。

○有相ノ現成、無相ノ現成ヲ。

弁二有相ノ現成トハ鉢アルモノヲ云人也。木ヤ草ヤナトヲ云タ。無相ノ現成トハ心ヲ云タ。又ハ緑ヤ花ヲ云タ。花ノ香ヲモ云タ。

○開山ノ云ク、現成ニ三種アリ。

弁、答云、目ニ見ル現成。耳ニ聞現成、口ニ云現成。是ヲ三種ト云タ。目ニ見ルトハ柳ハ緑花紅トミル。耳ニ聞トハ鐘敲笛尺八^{本文}丁表一三丁表^{本文}ヲ云タ。口ニ云トハ言句ヲ指テ云タ。何モセウセキヲトメタ也。

②【大中寺禪室内秘書】

△僧問趙州如何是祖師西来意○弁二意ハ元来何モノナイ者ニテ候。

(中略)

州答云、庭前栢樹子○ 意ハ栢樹子ト同前ヨト答。

師曰、趙州ノ栢樹ト答タニ、心ニ恰好シタ処アリ、弁セヨ。

江弁云、我カ身ヲ碎テミレ共意ト云テハ有テコソ栢樹ノアヲノト緑ヲ生タモ木ノ中ヲ碎テ見レ共、緑ハ有テコソ。栢樹ハ物コソユワ子、緑ノ出処ハ人ノ心ト同シ。千草万木モ同シ者ソ。如此心得則ンハ何輪廻セウスル者カ無イソ。

下語、柳緑花紅。

弁ニ柳ノ緑ナモ花ノ紅ナモ碎テ見レハ緑ノ色モナイ者也。関東西明寺殿栢樹子話ヲ參得ノ歌云、桜木ヲ碎キテミレハ色モナシ春コソ花ノ種ト成ケリ。又、種ト成ラン。又花ノ種トハ何ヲ云ラン。又花ノタ子トハ春トナリケル。又柳緑花紅。弁、柳ノ緑モ花ノ紅モ木ノ中ヲ碎見レバ緑ノ色モ紅ノ色モナイソ。故ニ意モ柳ノ緑リ花ノ紅イトヒトツ也。桜木ヲクタクミレハ色モナシ春コソ花ノ種トナリケリ。當座、ニ有テ當座ニナイ者チヤ。ナセニナレハ白ヲミレハ、ヤレ白イヨト思イ、黒イヲレハ黒イト思イ、花ヲミテハウツクシイ花ヤト思ヘ共、其意ハヤカテナクナルソ。故ニ有テ無イ者ソ。

又

△僧問趙州如何是祖師西來意。

弁、此意ト云物ハ元來ナイ物也。師拶云、貪欲嗔癡愚癡妄念ノ起ルハ意ヨリ起ル物チヤカ什麼無イトミタソ。

弁、有テナイ物也。是南浦大應國師ノ弁チヤ。又開山大灯國師ノ弁ニハ有ルニ似テ無イ物ト云ガ本弁チヤト可用也。

(中略)

州答云、庭前栢樹子。下語、柳緑花紅。師曰、此答話ヲ前ノ意ト曰ニ

引合テ弁シ將來。弁、栢樹子ト云ヲ人ノ五躰色身ニトリ子ト云ヲ意ニトルソ。五躰色身ヲ碎テミルニ貪欲嗔ノ起ハ當座ニ起テ一旦現スルマテ、コソアレ是コソ起ル意チヤト云セウゼキハナイソ。マツソノ如ク栢樹子ヲハ碎テミレトモ緑ノ色モ花ノ紅ナルモ根ニモ枝ニモナキソ。

去程ニ祖師西來ト問タホトニ庭前栢樹子ト答タソ。又柳緑花紅ト云句ノ心ハ世上ノ俗人ナトノ取沙汰スルトモ各別チヤソ。柳ハ緑ナルカ見事、花ハ紅ナルカミ事チヤトハカリ心得ソ。縁テハサウテハナイソ。緑ノアル木ヲ碎テミレトモ緑ノ色モナイソ。又紅イナル木ヲ碎テミレトモ紅ノ色モナキソ。其如クニ應物一旦現スルマテゾ。元來ハ無イ物ソ。………

(影印本、十一—十三頁)

③『禪法古則』第一卷

一△現成ノ境界之事 栢樹子ノ話ノ境界ノ事ジャゾ。一切千草万木ナトノ無心ノ事ヲ云タソ。

④『古則密參錄』、松ヶ岡文庫藏(ハ、一〇七六)

僧問、趙州如何是祖師西來意。

下語

如鐘裏扣 似鏡當臺 初日

火焰裏橫身 アシクソロ 二日

△水月鏡像 是者本師和尚ノ問也

水月ハミズ二月ガウツル様ニ跡カタモナイ鏡像モカ、ミニ物ノウツル様ニハヤウカワル物也。右者意字大一也。

現成也

庭前栢樹子 下語、八角マハン空裏走トスル処。アシク候テ古キ

下語ニ柳ハ緑花ハ紅ト義也。

現成ニテ下語スル

最明寺殿寄ヌ

△さくら木を碎て見れど花となく

以上の大徳寺派における栢樹子話に関する密参のいくつかを見てきたのであるが、これらの密参は基本的には大応国師南浦紹明と大燈国師宗峰妙超の見解に基づいて室内にて展開されているといえるであろう。すなわち大応国師は栢樹子話に対する「有テナイ物也」という見解を示し、また大燈国師は「有ルニ似テ無イ物」と弁じていたと伝えられるが、こうした見解を下地にして、例えば先に見たキリシタンや天台僧に伝えられたような内容の密参が形成されていたのである。

これは同一の密参録に複数の栢樹子の密参がある場合でも、基本的にはこの大応・大燈の見解を踏まえたものであり、さらには『龍岳和尚密参録』のように栢樹子の密参中に大聖国師（古岳宗旦）大徳寺七六世、一五四八年寂）や廣照国師（古溪宗陳 大徳寺一一七世 一五九六年寂）の語が引用されて重層的に蓄積された形として伝えられていたのである。¹⁵⁾

こうした大応・大燈の伝統を受けてこの栢樹子話の密参では特に「祖師西来意」中の意の有無について中心的に商量され、「柳緑花紅」や「水月鏡像」の下語も意が有なれども無という主旨の著語であることが明示されている。②の久松抱石蔵『百五十則』では「又柳緑花紅ト云句ノ心ハ世上ノ俗人ナトノ取沙汰スルトモ各別ヂヤソ。柳ハ緑ナルカ見

事、花ハ紅ナルカミ事チヤトハカリ心得ソ。爰テハサウテハナイソ。緑ノアル木ヲ碎テミレトモ緑ノ色モナイソ。又紅イナル木ヲ碎テミレトモ紅ノ色モナキソ。其如クニ應物一旦現スルマテゾ。元来ハ無イ物ソ。」とあつて、一般的な「柳緑花紅」の理解とは異なる見解が西明寺殿、すなわち北条時頼の歌「桜木ヲクタキテミレハ色モナシ春コソ花ノ種トナリケリ」とともに提示されていたのである。

③の資料では、八境界という大徳寺派の特有の古則の捉え方の中で「現成」という項目の中にこの栢樹子話がその代表的な境界として掲げられていることがわかる。

また④の資料は、大仙門下三玄派で大徳寺三九八世要道宗三（一七九五年寂）の筆となる密参録の冒頭であるが、江戸中期に至っても、やはり栢樹子参究において中世以来の大徳寺派の伝統が続いていたことが確認される。しかるにその下語は「八角磨盤空裡走」であり、いわゆる「柳緑花紅」の下語は「古キ下語」とされるものの、これを現成の境界としてみる伝統は白隠以降も伝えられていたのである。

四、趙州栢樹子話に関する妙心寺派の密参について

—— 特に関山賊機話について

さて次に妙心寺派の栢樹子話に対する見解をみていきたい。

①『碧前碧後臨濟録密参』（松、クハ八八二）

廿七、趙州栢樹子。▲趙州因僧問、如何是祖師西来意。州云、庭前栢樹子。

〱柳緑——。〱松直棘——。●正与广時如何。〱松不直棘不曲。

●畢竟如何。へ松自直棘自曲。

●僧云、禾上莫將境示人。へ狂狗遂——。へ貧看天上月——。

●州云、我不將境示人。へ紫羅帳裡——。へ獅子咬人。

●僧云、如何是祖師西來意。州云、庭前栢樹子。

へ太冶精金無——。へ虎頭虎尾——。へ臂膊不向——。

廿八、類法眼栢樹子。▲清涼法眼單巾問覺鉄觜云、承聞先師有栢樹子

話是否。

へ金以火——。へ句裡呈機——。

●覺云、先師無此話、莫謗先師ノ好ヲ。へ含血噴人先——。

へ●酒一否當——。有意氣時——風流。

●眼云、真師獅子兒能獅子吼。へ衆角雖多——。へ定龍蛇眼擒虎兒機。

廿九類、大梅西來無意。▲大梅因僧問、如何是西來意。大梅云、西來

無意。へ万里——。和盤托出——。話尽山雲——。へ官不容針

——。

三十、類関山栢樹。▲関山云、栢樹子ノ話却知有レ賊機手段——。

平這賊。栢樹子賊機ナイヲ賊ノ機アリト云タカ賊チヤ。

●是賊。関山モ賊、禾上モ賊

徹翁辨云、平カク云慧玄藏主コソ一重上ノ深イ賊ナレ。句面上夾竹桃花

——。

②『碧前碧後』クハ八八四・一一二

廿六、▲趙州因僧問、如何是祖師西來意。

(本文、一二丁裏—一三丁裏)

著五鳳樓前問洛陽。又遍問諸方。

○拶云、此意ハ有リトヤセン。無シトヤセン。

答云、有_レ非_レ有_レ、無_レ非_レ無_レ。

○拶云、非_レ有_レ非_レ有_レ、無_レ有_レ非_レ有_レ、為_レ什_レ出来タゾ。答云、風來波浪起_ル。

○拶云、無_レ風時如何、答云、無_レ風波亦無_シ。

○拶云、畢竟如何。着白圭無_レ玷。又萬里一條鉄。

○州曰、庭前栢樹子。着松直棘曲。

○拶曰、正与_レ广時如何。答曰、松不直棘曲。

○拶曰、更_レ恁_レ广時如何。答曰、松直棘曲。私云、色即是空、々即是色ト

ミルソ。

○拶云、端的如何。答云、佛祖モ不識。

○僧云、和尚莫將境示人。狂狗遂魂。又希貧看天上月——珠。又當面蹉

過。

○州云、我不將境示人。着手臂不向外曲。又和盤托出——珠。又平生肝

膽向人傾。又無孔鉄鎚當面擲。

○僧又問趙州、如何是祖師西來意。着一不作二不休。又希一橫脱出。又他

一面拳着——新。

○州又云、庭前栢樹子。着錦上添花別是春。又希モ同太冶精金無變色。又塞

北安南一道収。又詩到重吟始見功。又虎頭虎尾一時収。又無孔鉄鎚重

下槌。

私云、起信論云、煩惱相續。或滅或起。猶如風來。浪起風止水靜。

可并按前ノ平和ノ處。

又希下

○趙州因——意。着与前同。

○抄云、僧ノ問夕處ハ且置。如何是祖師意。平人々具足、々々圓成ノ祖師意チヤ。着君看陌上二三月那樹枝頭不帶春。

○州曰、庭——子。平別ニ答ヨクスル事ガナイ程ニ栢樹子ト答ヘラレタ。着語ハ与前同。摠ノ是ヨリ以下ハ前所記ト同。了畢

廿七、△後來法眼問覺鉄觜云、承聞、先師有栢樹子話是否。

着若不垂芳餌爭知碧沼深。又他金以火試。又句裡呈呈機。

○覺云、先師無此話。

○抄云、為_レ什_カ此ノ話ナシトハ云レタソ。答云、子不_レ璞父ノ徳ト云

機チヤ。着良賈●藏若虛。本光国師云、若_レ虚觀夜參トヨムガヨイ。

是ハ老子經ノ語ゾ。又咬人獅子不露爪牙。又不風流處也風流。又他知盤

托出夜明珠。又官不容——馬。

○莫_レ謗ニ先師一好。着不是少林客難為話雪庭。是レハ知音ノ句ゾ。又

釘觜鉄舌得人憎。又悟有意氣時添意氣。又鯨吞尽——枝。又鶴酒一盃當

面傾。

○眼曰、真獅子兒能獅子吼。着衆角難多一鱗足。又定竜蛇眼正。私云是非

ヲヨク見定タ句也。又是放開是捏聚。又苦●●根苦。又祥鱗一角尖。

了畢

廿八、△関山曰、栢樹子ノ話有賊機。平栢樹子ノ話、賊ノ機ナシ。和

尚是レ賊。又サフ云和尚コソ一重上ノグラブカイ賊ヨ。又、元來賊ノ

機ナキヲ、アリト云タハ賊チヤ。着水遠山長人面獸心。又面上挟竹桃

肚裡參天荆棘。了畢

又

関山曰、栢樹子話有賊機。

○抄曰、栢樹子ノ話ニ却テ知_レ有_レ賊手段麼。答云、這ノ賊。

○抄曰、誰ヲ指_レ賊トスルソ。答云、関山モ賊。和尚モ賊。

○抄云、何ントノ賊トハ云ソ。答云、元來賊機ナキオ有_ト云タハ賊チヤ。着面上扶竹——棘。又水遠山長人——心。又水遠山長人——必是賊知識。

私云、亀曰、関山曾對徹翁曰

栢樹子話ニ有賊機。

徹翁曰、サク云和尚コソ一重上ノフカイ賊ヨト有タト云。

このような妙心寺派で取り上げられる栢樹子話は大徳寺派のそれと大きな相違点を見ることができであろう。例えば①の『碧前碧後臨濟録密參』の用例について見るならば、まず二十七番目の本則としていわゆる「庭前栢樹子」までの問答が示され、これに対して「柳緑花紅」・「松自直棘自曲」の下語が提示される。この中「柳緑花紅」は大徳寺派密參録にも見られた下語であり、また「松自直棘自曲」の句は大徳寺派には見られなかったものの、ほぼ同様の境界を示すものである。ところで大徳寺派の密參ではこの栢樹子までが拈提され、これはちようど『無門関』の栢樹子話に相当する本則の商量となっていた。これに対し妙心寺派の密參ではすべての本則に趙州の法嗣である覺鉄觜（光孝院慧覺）の語、すなわち先師趙州に栢樹子話はなし、とする話を付随させている。そして続いて関山慧玄の「栢樹子話有賊之機」

が提示されるのである。この関山賊機の話は覚鐵嘴までの話と独立してそれぞれ別に記されることもあるが(例えば駒澤大学蔵『碧前碧後』や真田宝物館蔵『碧前碧後』)、この栢樹子話における覚鐵嘴の話は関山の語に連なっていくものと考えられる。無論筆者の分別解釈の及ぶところではないが、この関山の話は「柳緑花紅」という現成底として受け止める大徳寺派の見解を受け止めながら、さらにこの栢樹子を賊機として純熟させていくありようを見て取れるのではなからうか。ある意味で覚鐵嘴と法眼の話は関山賊機の話を導入するための布石であるとも考えうるのである。また密参の最後に関山に対する徹翁義亨の「カク云慧玄藏主こそ一重上ノ深い賊ナレ」の語はその後の徹翁派と関山派の歴史的な対立を顧みると、徹翁派の関山派批判の根拠ともなったであろう。いずれにしてもこの問題には大徳寺派・妙心寺派の禅理解にとつて大変大きな意味をもつ課題であり、さらなる考察を加えてみたいと思う次第である。

注記

- (1) 四百七十則とは、『百五十則』を百五十則分、『碧巖類則』を百則分、『雲門録百則』を百則分、『大灯百二十則』を百二十則分としてみた古則数であるが、厳密にいうならば個々の写本においては公案数は若干の相違がある。例えば『百五十則』の場合、前百則は実際には八境界を最後に含めて百二則とする場合が多い。
- (2) ただし『雲門録百則』(駒澤大学蔵、一二五・二七)の四七則・五〇則・五一則・五九則には「於百五十則之内」と記述が見られる。な

- お、この『雲門録百則』・『雲門』(駒澤大学蔵一八八・八四―四二二)については飯塚大展氏による「大徳寺派系密参録について(一)——『雲門録百則』を中心にして」(『宗学研究』第三六号)を参照した。
- (3) 飯塚大展、前掲論文。この論考において飯塚氏は「碧巖類則」についても言及し検討されている。

- (4) 飯塚大展、「大徳寺派系密参録について(三)」(『曹洞宗研究員紀要』二五号に所収)、一四一―一四二頁。

- (5) 「世尊拈華」に「寛文元八月請益」(十二丁表)、「趙州牆外底」に「寛文貳年七月三日ノ朝」(二五丁表)、「雲門普」に「寛文三癸卯五月十六日朝分」(二六丁表)の頭注あり。

- (6) 各古則名については△印が付された名称を掲げたが、古則名が記されていない場合は他の密参録を参照して示した。なお古則名の前に公案の題材となった佛や祖師の名が次のように示されている。

- 「汾陽古則」(第8則)、「臨濟古則」(第11則)、「佛説古則」(第13則・第20則・第22則)、「佛説話」(第14則)、「趙州古則」(第17則)、「文殊古則」(第21則)

- (7) 鈴木省訓「碧前碧後」『天台思想と東アジア文化の研究』(平成四年)所収。

- (8) 『大淵代』の頭注には「寛永二年正月廿八日多寶院入院」(上、一八丁表)・「寛永十一甲戌仲冬三日 安國山総寧禪寺入院」(下、三五丁裏)とあり、こうした記述と年代順に掲載されている代語を調べることによつて、「乾國七年忌」の代語が説示された年代が元和八年であることが確認される。

- (9) このことは梶谷宗忍訳注『宗門葛藤集』二三頁に指摘されている。
- (10) この日付は先に検討した大徳寺派密参録の書写年代と同じであることになる。
- (11) 例えば西教寺蔵『古則双紙』四二丁表。なお、この栢樹子話に関する密参録資料としては参考となるのは、飯塚大展氏による『龍岳和尚密参録』や『百』などの翻刻資料であり（前出の『大徳寺派系密参録』について(三)）、本稿においても参照させていただいた。この資料においても「一千七百則公案帰栢樹子話一則」の一句が『龍岳和尚密参録』（二五三頁）や『百』（一四七頁）に引用されていることが確認される。
- (12) 井手勝美『ギリシタン思想史研究序説』（ペリかん社、一九九五年）に所収。
- (13) 井手勝美、前掲書、二〇七頁参照。
- (14) 「○師抄曰、親到学者ハ、先参ニ栢樹話ニ耶、先参ニ万法話ニ耶、弁来レ、△弁ニ、先栢樹話ヲ参シタガヨイ、ナセニナラバ、栢樹ノ話ヲ参徹スレバ、現成ノ上ヲテ、色相ハ何ンチャ、去程ニ、栢樹話一則デモ休歇スルゾ。」『龍岳和尚密参録』飯塚大展『大徳寺派系密参録』について(三)、『一五四頁参照。
- (15) 飯塚大展、前掲論文、一四八頁・一五五―一五六頁参照。